

2023年10月2日

みずほディーラーズアイ (2023年10月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 146.00 ~ 153.00

金融市場部 グローバルFIチーム 大橋 開

■ 先月の為替相場

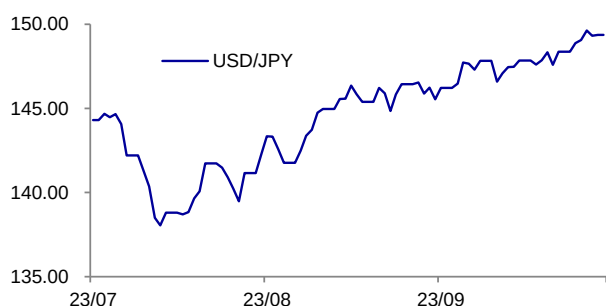
先月のドル円相場は、145円台半ばでオープン。1日に発表された米8月雇用統計でNFPが予想を上回るも、失業率悪化・平均賃金伸びは鈍化等、労働市場の逼迫が緩和されるとの見方から144.44円まで急落。その後は米8月ISM製造業景気指数の予想比上振れ等を背景に146.30円まで上昇。第二週目、週前半は米金利上昇に追従し147円台後半まで上昇。6日に神田財務官の円安牽制発言等を受けて147円台前半に下落するも、米8月ISM非製造業景気指数の堅調な結果から147円台後半に値を戻した。7日には、仲値にかけ円売りが強まり年初来高値となる147.87円まで上昇するも、日本株の軟調さや米金利低下等から長続きせず下落。8日には、朝方に米商務省による中国製華為技術の半導体について調査との報道を受けたリスクオフや鈴木財務相の円安牽制発言を受け146.60円まで急落。一方でその後は、実需による買い等に支えられ、147円台後半まで値を戻す。第三週目、11日の植田日銀総裁がインタビューにて、早期マイナス金利解除の可能性について言及したことで円買い優勢となり、147.15円付近でオープン。その後、中国当局の円安牽制発言を受けたUSD/CNHの下落も相まって水準を下げると、一時145.91円まで下落。一方で、13日の米8月コアCPI(前月比)が予想を上回ったこと、14日の米8月小売売上高・米8月生産者物価指数の強い結果等が材料視され、147円台後半まで上昇。第四週目、週前半は147円台半ばから後半でのレンジ推移。20日のFOMCでは、FEDメンバーによる2024年の政策金利見通しが上方修正された内容等が材料視され、148.12円まで上昇。その後、記者会見にてパウエルFRB議長から「適切ならさらに金利を引き上げる用意がある」との認識を示した事を受け、ドル買い優勢となり148.36円をつけ年初来高値を更新。21日には、米金利が高水準で推移する展開から年初来高値の148.46円まで上昇。FOMC後の買いが一巡し、米短期金利低下に追従し、一時147.32円を付ける。その後、22日にはBOJが金融政策の現状維持が発表され、ドル買いで反応し148.16円まで上昇。植田日銀総裁の記者会見では、市場の早期マイナス金利解除の思惑を打ち消すと円は更に売られ148.42円まで上昇。最終週、鈴木財務大臣の円安牽制発言が入り一時下落するも、日米金融イベントを消化したことで、金融政策の方法性の違いが意識され、年初来高値を更新しながら上昇し、一時149.71円をつける。昨年介入が入った際の水準150円近辺に近づき、市場では介入の警戒感が徐々に高まっている状況。

■ 今月の見通し

10月のドル円は底堅い展開を予想。背景となる主な材料を3つ挙げる。
①**日米金利差**: 米国では、9/21FOMC会合にて、パウエルFRB議長はインフレが目標に向かって持続的に低下していると確認が持てるようになるまで、政策を景気抑制的な水準に維持する考えを示し、市場はHigher for longerというメッセージを受け取った形。またFEDの四半期経済予測では、FOMC参加者12人/19人が年内あと1回の利上げを支持。足元の市場が予想するFOMC政策金利見通し11月0.2回、12月0.4回(1回あたり25bp)利上げが織り込まれており、利上げ折込みの余地がある。日本では、9/22のBOJ会合にて、植田日銀総裁は、賃金と物価の好循環を見極めるのに十分な情報やデータが年末までにそろう可能性もゼロではないことに言及。また、賃金上昇を伴う持続的な物価上昇に確信が持てた段階になればマイナス金利政策の解除を含めて色々なオプションがあるとも言及。急な日銀の利上げに対するスタンスの変化には要注意だが、明らかにFEDとBOJの政策金利見通しにギャップがある状況。
②**米20年債先物(USZ3)のCTD**: 9月の月間では、米経済成長の強さや国債償還の増加等により米債イールドカーブは終値ベースで約20~52bp上昇。このまま金利上昇が継続する場合、米20年債先物(USZ3)のCTDが変わりデュレーションが延伸するリスクがある。USZ3のロングを保有している投資家としては、突如デュレーションが伸びてしまうため、調整のための売りが想定され、更に売りが売りを誘発する展開に要留意。
③**人民元**: 中国国内の不動産不況が深刻化し景気減速懸念が強まる中、9月14日に大手銀行向け預金準備率を0.25%引き下げる等、主要中銀の政策運営とは対照的に金融緩和を進めている。加えて、当局は直近介入を実施し元安を抑制している。ただし、このまま米金利が高止まり/上昇する場合、中国経済が耐え切れずアジア通貨安によるドル高の影響は無視できない。一方で、リスクシナリオとしては主に下記の2つの材料が挙げられる。
①**日銀による介入**: 足許のドル円は、昨年の介入の水準に近づき市場では警戒感が少しずつ高まっている。ただし、仮に介入した場合でも上述した事に加えて、原油(円貨)はレンジを抜けて高値をドライブしている状況。そのため、貿易赤字が想起され介入効果は限定的と考えられる。
②**米国政府閉鎖による米国価格下げ**: 米国では、新年度(10月1日)を目前として議会で歳出法案の議論が難航中。このまま結論が出ず、政府閉鎖となり米国債の格下げが決定された場合、ドル安・株安という展開が想定される。

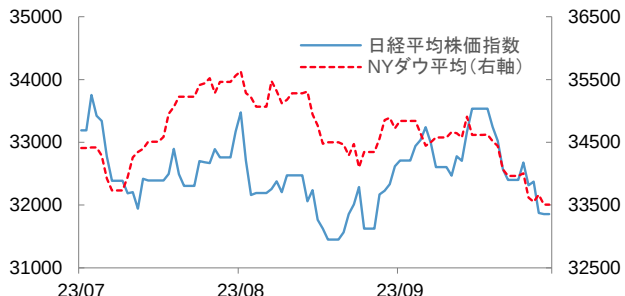
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	非農業部門雇用者数変化	8月	170k	187k	187k
9/1	失業率	8月	3.5%	3.8%	3.5%
9/1	平均時給(前年比)	8月	4.3%	4.3%	4.4%
9/1	平均時給(前月比)	8月	0.3%	0.2%	0.4%
9/6	ISM非製造業景気指数	8月	52.5	54.5	52.7
9/13	CPI(前月比)	8月	0.6%	0.6%	0.2%
9/13	コアCPI(前月比)	8月	0.2%	0.3%	0.2%
9/14	小売売上高速報(前月比)	8月	0.1%	0.6%	0.7%
9/14	PPI 最終需要(前月比)	8月	0.4%	0.7%	0.3%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	15名	152.00 ～ 146.00	ベア	1名	151.00 ～ 144.00
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ブル	154.00 ～ 147.00	日米間の金融政策に大きな隔たりが確認されたことや資源高による本邦貿易赤字の拡大が円売りを牽引。当局による介入には留意も、同警戒感がドル円の上昇速度を抑えキャリートレードを喚起する可能性もあり、ドル円のじり高を予想。	松永	ブル	151.00 ～ 145.00	米国経済の軟着陸への期待、原油高、FRBの金融引締めスタンス継続への思惑からドルは底堅い動きが継続しよう。ただし米個人消費、企業設備投資、住宅需要などの指標が弱含むようであれば円高方向に調整する可能性もあり注意したい。
河合	ブル	151.00 ～ 146.00	10月FOMCでのドットチャート上方修正・米金利上昇を受け、じりじりと上昇を続けるドル円だが、米金利の上昇余地も限定的であることに加え、本邦当局の介入警戒感もあり、基本ブル目線も上値の重いレンジ推移を予想。	田川	ブル	152.00 ～ 145.00	先月の本欄と同じく、YCC解除期待や円安けん制発言は現状でトレンドを変えるには至らず。結局Fedの“Higher for Longer”という土台となっているテーマは不変。よってUSD/JPY上昇トレンドも不変。
川端	ブル	152.00 ～ 147.00	9月会合で日米の金融政策の方向性の格差がより一層顕著となり、金利差のみならず市場参加者の期待としても円高は見通しづらい状況。一時的なポジション調整や介入以外に円買い要因に乏しくじり高推移継続とみる。	上遠野	ブル	152.00 ～ 146.00	資源価格高騰や米国コアインフレの粘着性を背景に米金利の高止まりがなおも意識される局面。中国経済先行き不安や欧州圏の利上げピークアウトを見つめつつ、相対的にドルが強含みか。
加藤	ベア	151.00 ～ 144.00	解散も取沙汰されるほど政局が注目を集め始めた。これまで政府はインバウンド期待で円安を黙認しているとの見方もあったが、9月26日に指示を出した経済対策の5本の柱でも物価高抑制をうたっている。	小林	ブル	152.00 ～ 145.50	9月の中銀会合では、年内の追加利上げを示唆している米FRBに対し、日銀は根気強く緩和政策の維持姿勢を改めて強調。日米の金融政策に対する方向性の違いを背景に、ドル円は円安トレンド継続を予想。
山崎	ブル	152.00 ～ 147.00	ドル円は、引き続き上昇傾向か。下落となる材料が見当たらず引き続きじりじりと上昇となる展開を予想する。半期を超えたところで、ドル円への介入警戒から、一辺倒とはならないと考える。	逸見	ブル	152.00 ～ 146.00	9月のFOMC、日銀会合を経て、日米の金融政策差が明確になる中、引き続きドルは底堅い推移。円の需給の弱さにも変化なく、ドル円は昨年の高値を試す展開を想定。
伊藤	ブル	152.00 ～ 145.00	日米金融政策を踏まえたドル高円安基調は変わらず。足元の原油価格上昇も円売り需要を強める材料。高値圏では為替介入実施の可能性が高まるが、実施したとしてもファンダメンタルを鑑みると、145円程度までの下落が限界か。	鈴木	ブル	151.00 ～ 147.00	米国経済の堅調さ、金融引き締めの長期化を見越したドル買い基調が優勢。為替介入への警戒感は煽るため、勢いよく上値を試す展開は想定できないものの、底堅い推移が続くと予想する。
尾身	ブル	153.00 ～ 147.00	今月も米国の高い政策金利の維持と、日銀の金融緩和政策維持によりドル/円はドル高円安傾向が維持されると予想。但し、米国指標の悪化が見られると、ドル売りが強まる局面もあるか。	大熊	ブル	153.00 ～ 146.00	FOMCでタカ派姿勢を示したFRBに対して、日銀はハト派スタンスを維持、日米金利差と金融政策の方向性の違いが改めて意識されている。インフレ懸念により米長期金利も高水準にあることから、ドルの底堅さは継続すると予想。
山口	ブル	152.00 ～ 147.00	ドル高円安トレンドは継続すると予想。金融政策の明確な違い、さらに足元の原油高を受けドルが買われるだろう。ただし、150円を越えると為替介入への警戒感が強まるだろう。実際介入が入った場合の下落には注意したい。	西	ブル	153.00 ～ 146.00	9月FOMCを経て24年の利下げペースの後ろズレが見込まれている状況。日米金利差を背景としたドル高円安地合いは変わらず、政府・日銀による介入警戒感が煽る中でも底堅い推移が続くか。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0400 ~ 1.0850
EUR/JPY 156.00 ~ 160.00

金融市場部 為替営業第二チーム 山口 朋子

■ 先月の為替相場

9月のユーロ/ドルは、大きく下落する展開となった。月初、1.0843ドルで寄り付くと、米8月雇用統計にて失業率上昇や賃金鈍化が明らかになると米労働市場の逼迫緩和が意識され米金利低下に伴いユーロ/ドルは一時月高値となる1.0882ドルまで上昇。ただし、買いは続かず続いて発表された米8月ISM製造業景気指数の強い結果に米金利上昇・ドル買いが進むと、1.0772ドルまで下げた。さらに、翌週5日に発表されたユーロ圏8月サービス業PMI(確報)の弱い結果が嫌気されると、1.07ドル台前半まで続落。7日に発表されたユーロ圏4～6月期GDP(確報)の下方修正が嫌気されたことや、堅調な米経済指標を受けた米金利上昇が重しとなり、一時1.0686ドルに下落。その後、8日に発表された独8月CPI(確報値)が予想通りの結果となるものの、ユーロ/ドルは反応薄。その後、米金利低下を受け、1.0744ドルまで戻すも、その後は伸び悩み反落し、1.07ドル台で推移が続いた。

注目された14日のECB政策理事会では+25bpの利上げが実施されたものの、2025年のインフレ見通しやGDP成長率の下方修正が材料視され、ユーロが全面安。半年ぶりの水準となる一時1.0632ドルまで急落。その後は18日に「ECBが過剰流動性への対処方法を近く議論する計画」との関係者発言報道が流れたこともあり独金利が上昇に転じると、1.07ドル台を回復。ただし、20～21日の米FOMCがタカ派な内容だったことを受けてドル買いの展開となると再び1.0660ドルまで下落。

22日発表の仏9月総合PMIの市場予想比下振れを嫌気し1.0615ドルへ下落した後、25日のシュナールECB専務理事が「ユーロ圏の経済活動は明らかに減速しつつある」との発言や米金利の上昇が重しとなり、28日にかけて1.0488ドルへ続落し年初来安値近辺まで値を下げた。28日発表された独9月CPIが市場予想を下回ったものの、ドル売りに転じると月末1.06ドル台を回復した。

一方、9月のユーロ/円はドル主導相場だったこともあり、約2円の狭いレンジで推移となった。月初、157.75円で寄り付くと、7日にかけて一時158円台半ばまで上昇するも、欧州の弱い経済指標やドル円の下落も受け11日には月安値となる156.65まで下落。直後12日には月高値となる158.61まで反発。ECB理事会を受け再び156円台まで下落するも、月末にかけてはドル円の上昇を受け157円台後半まで回復した。

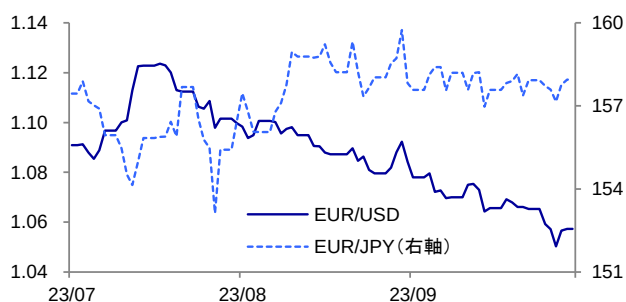
■ 今月の見通し

10月のユーロ相場は上値重い展開を予想する。9月のECB政策理事会において利上げが決定され、史上初めて10会合連続で利上げを行った。ただし、声明文では「現在の評価に基づけば、政策金利はそれが十分長期間維持されることで、インフレ率の目標へのタイムリーな復帰に多大なる貢献をする水準に達した、と理事会は考える」との認識を示したことで、利上げの最終局面を迎えたとの見方が広がった。発表直後からユーロ売りとなり、この流れは9月末まで続いた。理事会後もタカ派と知られるクノット・オランダ中銀総裁も「今の金融政策には満足している」と発言しており、ECBによる追加利上げはインフレの再加速がない限りは可能性が低いといえよう。一方で、米FOMCは大方の予想通り政策金利の現状維持が決定された一方、同時に発表された見通しで、年内の追加利上げ、さらに来年にかけても政策金利が高値圏で維持されるなどタカ派な内容となった。両国の金融政策の違いから10月もドルが選好される局面が続くと予想する。

さらに、欧州の経済指標に目を向けると、ドイツを中心に前月からの低下、さらに予想を下回るものが続いている。9月19日にOECDが発表した経済見通しにおいてもユーロ圏経済の今年の成長率見通しは前年比+0.6%(前回+0.9%)に下方修正されている。さらに、中国経済の景気先行き懸念も引き続き燃り続けており、欧州域内外ともに不透明感が強い。片や米国は堅調な成長を続けていることから、景気の温度差もユーロ売り要因となろう。10月に発表される米国の経済指標が強いものが続いた場合、ユーロ/ドルの一段の下落に警戒したい。

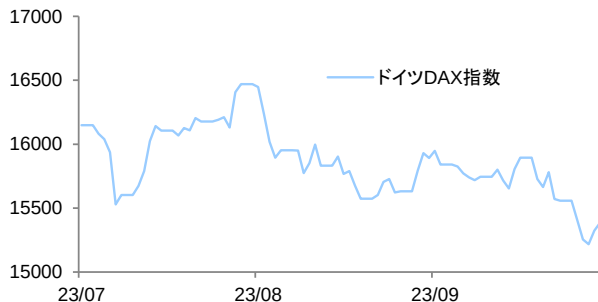
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	HCOBユーロ圏製造業PMI	8月	43.7	43.5	43.5
9/7	GDP(季調済/前期比)	2Q	0.3%	0.1%	0.3%
9/7	GDP(季調済/前月比)	2Q	0.6%	0.5%	0.6%
9/14	ECB主要政策金利	9月	4.25%	4.50%	4.25%
9/19	ユーロ圏CPI(前年比)	8月	5.3%	5.2%	5.3%
9/19	ユーロ圏CPI(前月比)	8月	0.6%	0.5%	0.6%
9/19	ユーロ圏コアCPI(前年比)	8月	5.3%	5.3%	5.3%
9/22	HCOBユーロ圏製造業PMI	9月	44.0	43.4	43.5

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	3名	1.0850 ～ 1.0450	ベア	13名	1.0750 ～ 1.0400
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	1.0650 ～ 1.0100	米欧の金利差拡大継続や景況感の差異を背景にユーロは弱含む展開か。また、金融政策の転換期に接近するなか、ECBの政策が機動性に欠ける可能性や投機筋のポジション調整がユーロ売りの流れを形成中であり、ユーロベアを予想。	松永	ベア	1.0700 ～ 1.0400	ECBは9月会合で今後の景気見通しを下方修正。景気後退への懸念が引き続きユーロの上値を抑えよう。原油、ガス価格が冬の需要期に向けて高止まりするようであれば更なる下押し圧力につながる可能性もあり警戒したい。
河合	ブル	1.0850 ～ 1.0450	10月ECB政策理事会での経済見通しの下方修正・ハトな声明文内容、また欧州の景況感悪化を示す経済指標が発表され、下落を続けるユーロドルだが、他方、米金利上昇余地も限定的で、売られ過ぎの反動から、反転上昇となる展開を予想。	田川	ベア	1.0700 ～ 1.0400	ユーロ圏9月PMIは製造業・サービス業共に節目50を割り込んだことや、ECB高官による景気減速発言などにより、欧州景気後退懸念が強まっている。EURは基調売られやすい展開で見ておきたい。
川端	ブル	1.0850 ～ 1.0450	9月会合で政策金利ピークアウトが明確に表明され、9月後半に軟調地合いを強めたが、年初来の上昇を全て吐き出しており、ポジション調整的な下げは歯止めがかかる。コアインフレの鈍化が確認されない限りレンジ内を反転上昇とみる。	上遠野	ベア	1.0750 ～ 1.0350	スタグフレーションの拡大を防ぐべく難易度の高いオペレーションを迫られる局面。インフレ高止まりや域内景気動向について依然改善の兆しは見えず短期的にはユーロ買い戻しの材料に乏しいか。
加藤	ベア	1.0700 ～ 1.0450	実需のフローによるユーロ買いは引き続きユーロの下値を支えるであろうが、ECBが事実上利上げ停止を表明したことと比べてFRBは未だにターミナルレートに達したとは明言していないことは大きいと考える。	小林	ベア	1.0800 ～ 1.0300	9月ECBは利上げを実施したものの、24年度以降の見通しが引き下げられ、EUR全面安の展開となった。一方で、米FRBは年内の追加利上げを示唆しており、ユーロ圏の景気回復が見通せない中では、EUR軟調推移を予想。
山崎	ベア	1.0700 ～ 1.0500	ドル高ユーロ安の流れが引続くものと想定。米国の年末にかけての利上げ予想が引続き高いことからドル高傾向かと想定。下値は限定的と考えており、底堅い推移が続くものと予想。	逸見	ベア	1.0750 ～ 1.0300	利上げをもつてしても市場の反応はユーロ売りであり、7月からの下落トレンドは抜け出せず。中国の経済減速懸念も燃る中、欧州経済への波及が意識される中、引き続きユーロは軟調地合い継続と考える。
伊藤	ベア	1.0850 ～ 1.0300	ECBは未だ利上げ停止を宣言していないが、市場ではターミナルレート到達との見方が支配的。一方、FEDは再利上げに動く可能性は高く、EURの重さはやむなし。EURロングポジションの積み上がりも上値を押さえる要因か。	鈴木	ベア	1.0700 ～ 1.0400	景気見通しの下方修正や利上げ気運の低下など、FRBとの格差は大きい。エネルギー消費量の高まる冬に向けて、ユーロ圏の供給状況も懸念されるタイミングであり、軟調な推移が継続すると予想する。
尾身	ブル	1.0800 ～ 1.0300	ECBの高い政策金利の維持により底堅い推移が継続すると考えている。但し、米国も高い政策金利を維持しているため、もみ合いが継続し値幅は限定的か。	大熊	ベア	1.0800 ～ 1.0400	FRBは年内追加利上げの可能性を残している一方で、ECBは利上げ打ち止め観測が浮上している。欧州経済の先行き懸念が高まっているところに原油高が重しとなり、ユーロは軟調な動きを予想。
山口	ベア	1.0850 ～ 1.0400	景気の下振れが続く中、ECBは実質利上げ終了宣言を行った。一方、年内の利上げ、さらに来年も政策金利の維持を維持する姿勢を見せている米FOMCでは金利差の観点からユーロ売りが続く予想。	西	ベア	1.0800 ～ 1.0300	ECB理事会において実質GDPの見通しが下方修正されるなど、景気後退懸念が引き続き意識される。また、利下げ停止が示唆されていることから、対ドルで弱含む時間帯が続くだろう。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.0900 ~ 1.2400
GBP/JPY 179.00 ~ 185.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

9月の英ポンド相場は、FOMCでの「タカ派的据え置き」やBOEのサプライズの据え置きもあり、ポンド安・ドル高が一段と進んだ。さらに、原油価格上昇や、米政府機関閉鎖のリスクを背景とする米金利上昇もこうした流れを一段と強める要因となっている。

9月4日からの1週目、ポンドは対ドルで約▲1%下落。原油価格上昇、及び米国の強い経済指標を背景にグローバルに一段とドル高が進んだほか、6日にペイリー総裁が議会財務委員会の公聴会において、政策金利をさらに引き上げる必要はなくなった可能性があるとの認識を示したこともポンドの重しとなった。

2週目のポンドは対ドルで▲0.7%続落。特に14日のECB会合後に下落ペースが速まっており、ユーロ安・ドル高に巻き込まれた格好だ。ECBの9月会合では+25bpの追加利上げが決定されたものの、GDP見通しの大幅下方修正やフォワードガイダンスの変更もあり「ハト派的利上げ」という印象が強かった。また、英国の経済指標は総じて弱い内容であった。12日に発表された労働市場関連統計では、賃金（賞与を除く）の上昇率は7月までの3か月平均で前年同期比+7.8%と、2001年の統計開始以来の高水準を付けた前回と同水準となった。一方、失業率は4.3%と3か月連続で前月の水準を上回った。翌13日に公表された7月のGDPは前月比▲0.5%減少した。7月は雨天がちだったことと、ストライキが多かったことが経済活動の低迷につながった可能性はあるものの、サービス、建設、製造業と幅広い業種がマイナスに落ち込んでいる。

3週目もポンド相場は対ドルで▲1%強、続落。20日のFOMCは政策金利を据え置く一方で、年内の追加利上げの可能性を示唆するなど「タカ派的据え置き」の印象が強く、ドルが幅広い通貨に対して上昇した一方、21日のBOEの金融政策発表では追加利上げを見込む市場予想に反して、政策金利の据え置きが発表され、ポンドが下落した。その後、いったんBOEの政策金利発表前の水準までポンドは反発したものの、翌日22日に発表された英8月小売売上高、英9月サービス業PMI（速報値）の結果は市場予想を下回り、景気後退のリスクが意識されるなかでポンドには再び下落圧力がかかっている。

4週目は9月28日時点で、月末を前にしたドルの調整もあり、ポンドドルは1.22付近に反発している。

■ 今月の見通し

10月の英ポンド相場は、米金利上昇・ドル高に歯止めがかかる兆候が見られない中、対ドルでの下落が継続する公算が大きい。対ドルでのポンドの下落は、グローバルなドル高の裏返しという側面が強いように思われるが、9月には対円や対ドルでもポンドは下落している。対円では8月末の185円台から9月下旬にはいったん181円を割り込む水準までポンド/円は下落した。日銀の金融緩和長期化観測の高まりを受けて円安・ドル高が進んだものの、それ以上にBOEの据え置きのインパクトがマーケットにとって大きかったことであろう。

改めてBOEの9月会合について振り返ると、利上げ見送りがぎりぎりの判断であったことが伺われる。投票権を持つ9人のうち、ペイリー総裁を含む5人が利上げ見送りに賛成したが、4人が+0.25%の利上げが必要として反対していた。前日20日に発表された英8月消費者物価指数は前年同月比+6.7%と7月分の同+6.8%から低下、1年半ぶりの低水準となったことが利上げ見送りの決定打となっただろう。市場では同+7.0%への再加速が見込まれていた。ペイリー総裁は「インフレ率の大幅な下落が今後も続くだろう」とコメントしており、今後の利上げの可能性は低いとの解釈が広がった。

もともと、BOEの政策発表は一边倒というわけではない。量的引き締め（QT）による保有国債の年間削減目標は、23年10月から24年9月に償還と市場売却を合わせて1000億ポンドと、23年9月までの800億ポンドから引き上げた。さらに、ペイリー総裁は利下げに関する議論は「時期尚早」としている。

英国経済は9月分のサービス業PMI（速報値）が47.2に落ち込んでいるほか、住宅価格も下落しており、たしかに減速の兆候を強めている。もともと、ユーロ圏の主要国ではドイツの景気後退リスクやイタリアの財政悪化懸念などにより懸念材料が山積しているようにも感じられる。日本でも植田日銀総裁が緩和継続を示唆しているほか、岸田首相が10月中の経済対策策定を指示したことを受けて解散総選挙を巡る思惑も台頭しつつある。政局の不透明感は、日銀の金融政策正常化の後ずれ観測にもつながりやすい。あくまで消去法的に、ではあるが、ドル以外の主要通貨に対してポンドが買い戻されるシナリオもありえるだろう。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地の酒事情』

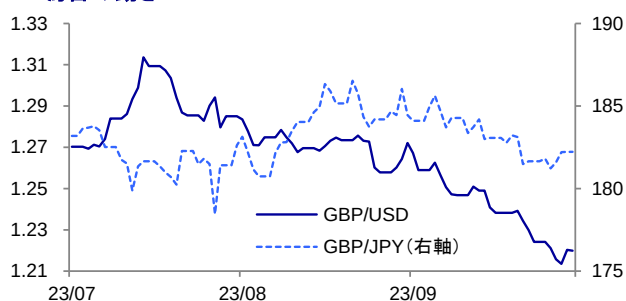
英国といえばパブであり、木～金曜日となれば、昼間からパブで飲み始めるオフィスワーカーも珍しくありません（私はそんなことは決してしません。。。）。

私もこちらに来てから様々なパブに行っていますが、イギリス人と行くと、日本でイメージするようなキンキンに冷えたラガービールではなく、常温で出されるエールビールを頼むケースが多いです。ラガーとエールの醸造方法の違いはここでは省きますが、エールは濃厚な味わいで香りがしっかりとしています。ロンドンはどうだか肌寒くなってきましたので、冷えたビールよりも、「ぬるい」エールビールがしっくりくるように感じます。

酒と言えば、スコットランドのエディンバラで行ったウィスキー博物館も印象的でした。スコットランドの地域ごとに醸造されたウィスキーの「利き酒」にチャレンジしたのですが、フルーティーなもの、コクのあるものと、地域ごとに見事に味が変わります。エディンバラ城の近くにありまので、スコッチウィスキーに興味のある方はぜひ訪ねてみてください。

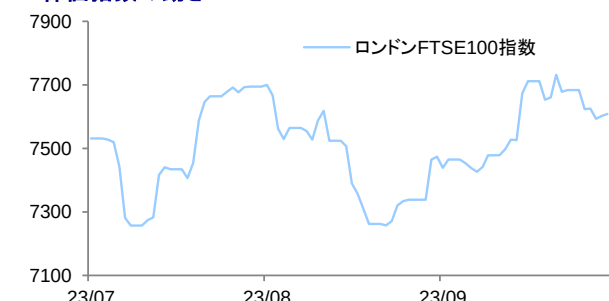
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	ネーションワイド住宅価格指数（前月比）	8月	-0.4%	-0.8%	-0.3%
9/12	週平均賃金（前年比）	5-7月	8.2%	8.5%	8.4%
9/12	失業率	5-7月	4.30%	4.30%	4.20%
9/13	月次GDP（前月比）	7月	-0.2%	-0.5%	0.5%
9/13	鉱工業生産（前月比）	7月	-0.7%	-0.7%	1.8%
9/20	CPI（前年比）	8月	7.0%	6.7%	6.8%
9/21	イングランド銀行政策金利		5.50%	5.25%	5.25%
9/22	小売売上高（前月比）	8月	0.5%	0.4%	-1.1%
9/22	製造業PMI	9月	43.2	44.2	43.0
9/22	サービス業PMI	9月	49.4	47.2	49.5

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6300 ~ 0.6700
AUD/JPY 93.60 ~ 98.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

9月の豪ドルは0.64台半ばでスタートし、20日にFOMCを控え米金利が低下するのを背景に月間高値0.6510近辺まで上昇したが、月末にかけて年初来安値を0.6331まで更新した。月初は0.64台後半で推移後、中国人民銀行による外貨預金準備率の引き下げ(6%→4%)や米8月雇用統計の軟化を背景にドル売りが優勢となり0.65台乗せ。5日にRBAが政策金利を4.1%に据え置き、3か月連続の据え置きとなった事で利上げ終了観測が広がり、豪ドルは売りで反応。声明文ではインフレ率のピークは過ぎたものの、サービス物価や家賃の伸びがまだ高水準であることを指摘。更なる金融政策の引き締めが必要になる可能性がある、従前の記述を繰り返した。6日、豪4～6月期GDPは前年比で市場予想を上回り2.1%(予想1.8%)、豪州経済の底堅さを示す結果となり、下値を支えた。中旬は14日、豪8月雇用統計が事前予想を上回る結果となると直後は豪ドル買いとなったが、就業者数拡大の背景が非正規雇用であることが確認されると買いは一服。19日、RBA議事要旨では9月理事会で25bp利上げも検討されたが、引き締めサイクルの効果がまだ表れていないリスクの方を重視すべきという結論に至り、金利据え置きを決定したことが判明。豪ドル動きは限定的であった。下旬、FOMCを控えて米金利が低下すると豪ドルは一時0.65台へ乗せた。但し実際のFOMCでは政策金利の据え置きと共に発表されたドットチャートで24年末、25年末のFF金利見通しが上方修正され、またパウエルFRB議長の見会でも、年内追加利上げの可能性を示唆する内容であったことから、「タカ派的な金利据え置き」と捉えられ、米国債利回りは大きく上昇しドル高が進行。0.6450近辺まで低下した。22日、日銀金融政策会合では緩和政策の維持が決定されると共に、フォワードガイダンスも変更無く、円全面安の展開に。25日、米10年国債利回りが一時4.45%まで上昇し2007年以來の高水準を付ける中、ドル買いから一時0.6404まで値を下げた。27日、豪8月CPIインディケーターが加速したことを受けて0.6409まで上昇。インフレ加速は主に燃料価格の上昇が要因で、変動要因と旅行を除いたCPIは前月から鈍化した。その後、米国債利回りが上昇幅を拡大し、米10年債利回りが16年ぶり高水準で推移する中、豪ドルは徐々に0.6350近辺まで値を下げたものの、その後は豪金利が上昇すると0.64台へ値を回復した。

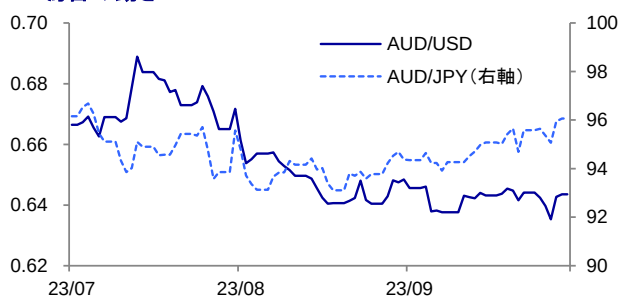
■ 今月の見通し

9月はRBAが3回連続で政策金利を据え置きとした事で利上げサイクル終了との見方が強まり、豪ドル安となる場面が見られた。対照的にFOMC会合では発表されたドットチャートで24年末、25年末の金利見通しが上方修正された他、年内の追加利上げの可能性が示唆された事で米金利が上昇し、ドル買いを背景に豪ドルは重く推移していた。但し月末に発表された豪8月の月次CPIインディケーターは4か月ぶりに上昇しており、1リッター当たりA\$2以上となっているガソリン価格に加え、ヘアサロン、レンタカー、スポーツ、保険、金融サービス等のサービス物価の上昇が寄与していた。労働集約的なサービスセクターの賃金上昇している事もサービス物価を支える形となった。豪8月CPIで潜在的インフレ加速のリスクが示されたものの、10月6日のRBA会合では政策金利を据え置くとの見方が強い。RBAは10月25日に発表される豪7～9月期の四半期データを見てから政策判断するとの公算が高いからだ。豪7～9月期CPIが上振れれば、市場で追加利上げ観測が再燃し、豪金利上昇を背景に0.65台へ再度上昇すると予想する。現在先物から見たRBAの利上げ織り込みは、2024年3月までに1回の利上げ(25bp)を織り込んでいる。豪7～9月期CPIの発表までは市場の注目は10月12日発表のFOMC議事要旨や17日発表のRBA議事要旨となる。議事要旨の内容が9月FOMC会合での決定はタカ派的据え置きであったことをリマインドし、上方修正されたドットチャートで潜在的追加利上げを再起させる事となれば再度米金利上昇でドル買いとなり豪ドルは引き続き頭を押えられるとみる。

豪州国内経済に関しては、家賃や住宅ローン返済額が高止まりする中、足元でモーゲージを持たない消費者や住居費値上がりのストレス下でない消費者層による消費が回復してきている。加えて9月はミッドシーズンセール期間があった為、一層消費に拍車がかかる見込み。豪9月家計消費、豪9月小売売上高の推移を見ながら、豪7～9月期CPIへの寄与度を確認したい。

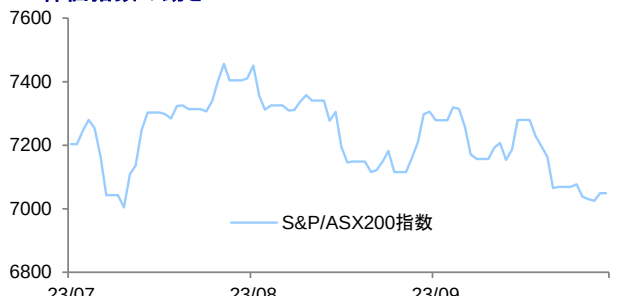
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
9/5	RBAキャッシュレート
9/6	GDP (前年比)
9/7	貿易収支
9/14	雇用者数変化
9/14	失業率
9/14	正規雇用者数変化
9/14	非正規雇用者数変化
9/19	RBA議事録要旨
9/27	CPI YoY
9/28	小売売上高 (前月比)

(資料) ブルームバーク				
期間	予想	結果	前回	
9/5	4.10%	4.10%	4.10%	
2Q	1.8%	2.1%	2.40%	
7月	A\$10000m	A\$8039m	A\$10268m	
8月	25.0k	64.9k	-1.4k	
8月	3.7%	3.7%	3.7%	
8月	-	2.8k	-18.7k	
8月	-	62.1k	17.3k	
9月	-	-	-	
8月	5.2%	5.2%	4.9%	
8月	0.3%	0.2%	0.5%	

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3350 ~ 1.3850
CAD/JPY 105.00 ~ 112.00

米州資金部カナダ室 ミタリ・チャクラデオ
岩田 保子

■ 先月の為替相場

8月以降のUSD高の傾向が9月上旬に渡って継続した。初旬は、9/1に発表されたカナダの第2四半期GDP成長率が予想に反して減速し、前期比年率▲0.2%とマイナスに落ち込んだ。市場では、利上げの影響が懸念され、9/6のカナダ中銀会合での利上げ観測がさらに後退し、カナダ2年債利回りは大幅に低下、USD/CADは1.36台へとUSD高CAD安が進んだ。9/6のカナダ中銀会合では、政策金利は予測通り5.00%で据え置かれた。また同日、米国で発表された8月ISMサービス業景気指数が前月から改善し、予想も上回ったことからUSD買いが継続。翌日発表された米国の週間失業保険申請件数が新規、継続ともに前週比減少したこともあり、USD/CADは9月の最高値となる1.3695まで上昇した。

しかし、9/8のカナダの8月雇用統計発表をきっかけに、CAD買いUSD売りへと流れが変わった。雇用ネット変化率は前月比大きく増加し、失業率は横ばいとなった他、賃金上昇率も上昇した。そして日銀植田総裁が新聞社とのインタビューで、今年末マイナス金利解除の可能性について言及したことや中国の融資統計の回復などを受け、USD売りが継続した。加えて、9月5日にサウジアラビアとロシアが原油の自主減産を12月まで延長すると発表したことから、原油価格の高止まりが予想されたこともCAD買い要因の背景となった。

9/19にはカナダの8月CPIが発表され、総合、コアともに予想を大幅に上回ったことから、カナダの長期金利が急伸し、CAD買い優勢でUSD/CADは一時1.3381まで下落した。翌日、FEDはFOMCにて予測通り政策金利を5.25～5.50%で据え置いたが、2024年末と2025年末の金利見通しを上方修正したことから、USD/CADは1.34台後半までUSDが買い戻された。9/22にはカナダの7月小売売上高が発表され、総合とコアはいずれも大きく落ち込んだ前月から回復したが、8月の速報値が前月比▲0.3%と軟調な数字が示されたため、USD/CADへの影響は限定的で月末に向けて1.34台後半～1.35台前半で推移した。

■ 今月の見通し

カナダ中銀は9/6会合で、政策金利を5.0%に据え置いた。背景としては、消費の伸びの顕著な鈍化、住宅市場の活動の低下、国内の多くの地域で発生した森林火災の影響から、第2四半期の成長率が急速に減速したことをあげ、「カナダ経済は、物価圧力を緩和するために必要な低成長期に入った」との認識を示した。

一方、労働市場での需給の逼迫が徐々に緩和しつつあるが、賃金上昇率が依然として高いこと、インフレ率は鈍化しているもののコアインフレ率が低下する兆候がないため、カナダ中銀は追加利上げの必要性を否定しなかった。そのうえで、今後も金融政策の決定には特に、超過需要の推移、インフレ期待、賃金上昇率、企業の価格設定行動が2%のインフレ目標の達成と一致しているかどうかを継続して評価していく方針を示した。

カナダの8月CPIが予想を大きく上回ったことから、その発表以後、10/25のカナダ中銀会合での市場における利上げ観測が高まっている。9/26日時点の市場での10月利上げ確率は46%であり、カナダの7月小売売上高発表後、やや低下しているが、9月のCPIもガソリン価格等の上昇によって8月分を上回った場合、次回会合で利上げが決定される可能性もあり得る。

今後の相場見通しの焦点は、引き続き、カナダの経済動向になると予想。特に10月は10/25カナダ中銀会合前に9月雇用統計(10/6)、カナダ中銀による第3四半期景気見通し調査(10/16)、9月CPI(10/17)のほか、8月小売売上高(10/20)が発表されるため、これらの結果が利上げの是非を決める上で非常に重要になってくると思われる。USD/CADのレンジとしては1.3350～1.3850と予測。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の酒事情』

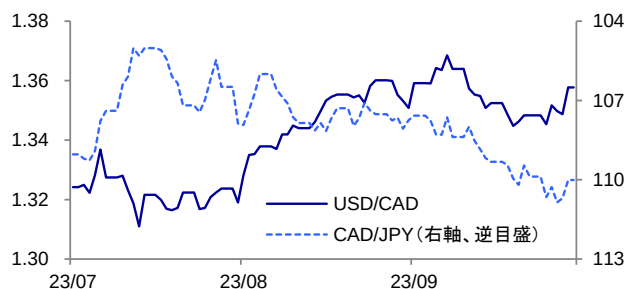
カナダでは、ビール、ウイスキー、ワインなど、人気のあるアルコールの品揃えが豊富である。ビールは定番で、現地のクラフトビール醸造所も沢山ある。最も人気のあるビールはモルソンとラバット。ビールの価格は州によって異なるものの、通常は標準的な355 mlのボトルまたは缶が約CAD 3～5となる。

クラウン ロイヤルやカナディアン クラブなどの象徴的なブランドを含むカナディアン ウイスキーも人気である。カナディアン ウイスキーの標準的な750mlボトルの価格は、ブランドと年代に応じて通常CAD 25～40の範囲になる一方、プレミアム品種はかなり高価になる場合もある。

最後に、ワイン愛好家はカナダのワイン、特にナイアガラとオナングンのワイン産地のワインを試すのはお勧めである。カナダワインの価格は大きく異なるが、1本のボトルはCAD15～20程度で購入できる。高級ワインの場合はCAD 50を超える場合もある。

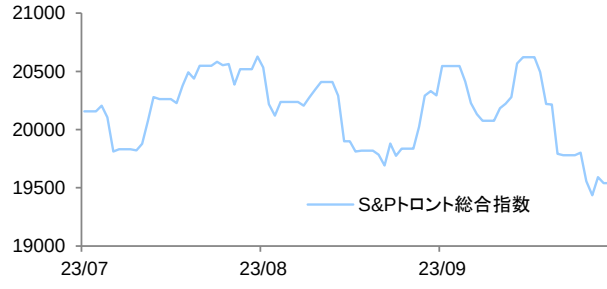
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	(資料) 予想	ブルームバーク 結果	ブルームバーク 前回
9/1	GDP(四半期/年換算)	2Q	1.2%	-0.2%	2.6%
9/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	8月	-	48.0	49.6
9/6	カナダ銀行翌日物貸出金利	9/6	5.00%	5.00%	5.00%
9/8	雇用ネット変化率	8月	20.0K	39.9K	-6.4K
9/8	失業率	8月	5.6%	5.5%	5.5%
9/15	製造業売上高(前月比)	7月	0.7%	1.6%	-1.7%
9/18	住宅着工件数	8月	250.0K	252.8K	255.0K
9/19	CPI(前年比)	8月	3.8%	4.0%	3.3%
9/22	小売売上高(前月比)	7月	0.4%	0.3%	0.1%
9/29	GDP(前月比)	7月	0.1%	0.0%	-0.2%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1310 ~ 1370
 KRW/JPY 10.87 ~ 11.36
 JPY/KRW 8.80 ~ 9.20

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

9月のドル/ウォン相場は上昇。月初のドル/ウォンは1,325.0ウォンでオープン。中国当局が外貨預金準備率引き下げを発表し、人民元高が進んだことでウォン高となり、1,320ウォンの節目を下回って推移した。1日海外時間の米雇用統計が低調だったことで、翌週4日には1,315.5ウォンの月安値をつけた。5日には一転して、中国のPMI指標が軟調だったことで人民元売りが進み、ウォンもこれにつられ下落。6日、7日にかけて1,337.5ウォンの高値をつけた後、当局による介入とみられるウォン買いにより上値は押さえられた。

翌週11日は1,334ウォン付近でオープンもその後人民元安・日本円安について各当局者からけん制発言がみられそれぞれの通貨が上昇したことで、ウォンもやや強含んで推移。12日からは米CPIを控え警戒感からドル売りとなり、1,320ウォン台での推移が続いた。14日海外時間でECBが予想外に利上げを決定したことで、内外金利差の拡大が意識され15日に一時1,330ウォン台までウォン安が進むも、その後人民元が堅調推移したことにより、水準を戻した。

翌週は週央以降に多くの中銀会合を控える中で18日、19日の相場は小動き。輸出企業のドル売りフローにやや軟調推移となった。その後米金利の上昇やFOMCへの警戒感からドル/ウォンは1,330ウォン付近で推移。20日米国時間にFOMCでは政策金利の据え置きが決定されたものの、来年以降の金利見通しを引き上げるなどタカ派な内容になったことで、ドルが全般的に買われ、ドル/ウォンも上昇。21日に月高値の1,342.2ウォンをつけた。

その後は輸出企業によるドル買いフローに押され1,330ウォン台での推移が続くも、26日に米金利上昇を背景にドル買いが強まったことで急騰。年初来高値を更新し1,349.5ウォンまで上昇した。大型連休前最終日の月末27日は海外時間のドル高を受けて朝方1,356.0ウォンの高値をつけ、1,349.3ウォンでクローズした。

■ 今月の見通し

10月のドル/ウォンは1,300ウォン台半ばでレベルを切り上げ揉み合い予想する。

9月末の大型連休前に、米長期金利が4.5%に乗せる動きを受けてドル/ウォンは上昇し、年初来高値を更新した。10月においても各種経済指標結果等を睨みながら米金利の堅調推移が継続すれば、ドル/ウォンは底堅く推移しよう。

10月19日にはBOK会合が予定される。BOKは従前から為替水準によっては利上げもあり得るとタカ派スタンスを維持している。しかしながら、現状の水準では当局者によるけん制発言が増加するものの、実際に利上げに踏み切る可能性は低いと考える。その他、BOKは家計負債の増加にも警鐘を鳴らしている。高金利環境にもかかわらず韓国の家計負債は増加傾向で2023年6月末時点の家計負債総額は1,862兆ウォンと3月末時点から0.5%の増加を見せた。GDPに対する家計負債の比率は105%とBOKが健全とする80%以内の水準からは大きく乖離する状況となっている。家計負債の増加は不動産関連借入れの増加に紐づくものと思われるが、政府は不動産市場の大幅な供給計画を発表する方針で消費者の購買意欲を抑える考え。金融政策により消費行動を抑制する方法も考えられるが、足許韓国経済が利上げに耐えられるほど好調とは言い難く、本会合は現状維持がメインシナリオとなる。

その他、韓国の8月貿易収支は3か月連続で黒字をキープしているものの、輸出額は前年同月比▲8.3%と11か月連続で減少している。最大の輸出品目である半導体の輸出は▲21.2%と13か月連続でのマイナスとなっている。本格的に半導体市場の回復への見通しがたてばウォンが上昇する兆しもあるが、まだそこに到達するには時間がかかるだろう。

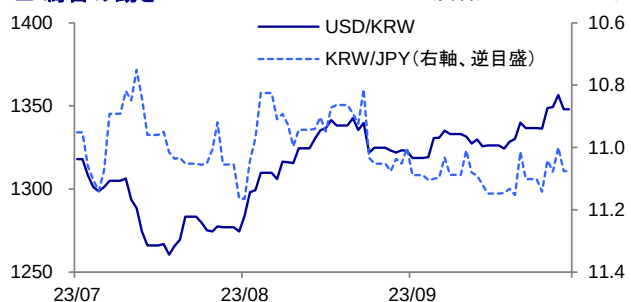
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の酒事情』

韓国ドラマや韓国料理店でよく見かける無色透明の蒸留酒「ソジュ」はご存じでしょうか。アルコール度数は20度前後のものが一般的ですが、小さなグラスでくいつとやったり、ビールとカクテルして飲んだりします。2022年には歌手で実業家のパク・ジェボム氏が立ち上げたソジュブランド「WON SOJU」が人気になりました。「WON SOJU」は韓国産の米を使用した添加物不使用のプレミアム蒸留式焼酎で、アルコール度数は22度と高めですが、さっぱりしてまろやかな味と風味が受け、特に若者の間で大人気になりました。一時は韓国内で品薄となっていました。最近では手に入り易くなっています。コロナ禍の渡航制限などでまだ飲んだことのない方は是非お試し下さい。(ソウル資金室 ハ・デソン)

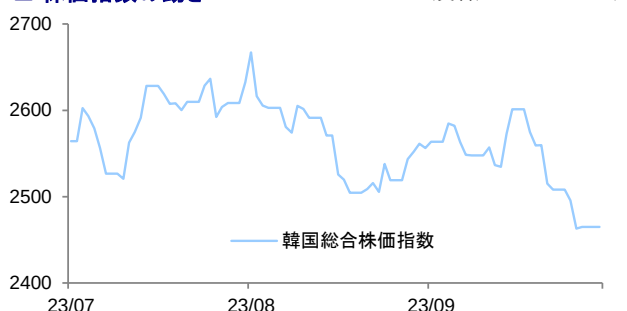
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	貿易収支	8月	-560M	870M	1,630M
9/1	輸出(前年比)	8月	-11.8%	-8.4%	-16.5%
9/1	輸入(前年比)	8月	-23.4%	-22.8%	-25.4%
9/5	CPI(前月比)	8月	0.6%	1.0%	0.1%
9/5	GDP(前年比)	2Q	0.9%	0.9%	0.9%
9/13	失業率	8月	2.9%	2.4%	2.8%
9/20	PPI(前年比)	8月	-	1.0%	-0.2%
9/26	消費者信頼感	9月	-	99.7%	103.1%
9/26	小売売上高(前年比)	8月	-	3.3%	5.9%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 32.10 ~ 32.50
TWD/JPY 4.55 ~ 4.68

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

9月のドル/台湾ドルは上昇し、年初来高値を更新。

月初の9月1日は31.820でオープン。人民元安や外国人投資家の台湾ドル売りから上昇圧力が掛かったものの、輸出企業のドル売りも入り、31.90付近で上値が重い展開が続いた。しかし、6日には米金利の上昇を受けて、台湾株が軟調に推移し、台湾ドル売りが優勢となると31.9台後半まで上昇。翌7日も台湾ドル売りが続き、約10か月ぶりに32台に乗せた。

月央は中国当局からの人民元相場の安定化について発言があり、人民元が大きく反発するとアジア通貨は全面高となり、台湾ドルも買われ、32台を割り込んだ。しかし、下値では輸入企業のドル買いも入り、すぐに32台に戻された。その後も32.0を挟んでもみ合う展開が続いたが、米8月CPIの結果がインフレ鈍化傾向と捉えられ、9月FOMCでの利上げ期待が後退したことから、14日にはアジア株が上昇する中、台湾株も上昇。台湾ドルも買われ、一時31.8台半ばまで下落したものの、すぐに31.9台に戻した。その後はFOMCを控え、31.9台のレンジで推移。

月後半に入り、FOMCの結果が発表されると、予想通り、政策金利は据え置かれたものの、ドットチャートで年内の1回の追加利上げや2024年の政策金利の上方修正が示されたことからタカ派に受け止められ、米金利が上昇。米金利の高止まりが警戒される中、21日には台湾株、台湾ドルともに売られて、ドル/台湾ドルは32.1台半ばまで上昇。その後、輸出企業の月末のドル売り等から上値は押さえられていたが、台湾株が軟調に推移したこともあり、26日には32.2台に乗せ、中秋節の連休前の月末日には一時32.294まで上昇し、年初来高値を更新した。

■ 今月の見通し

10月のドル/台湾ドルは上値を試す展開を見込む。

9月はFOMCを受けて米長期金利が上昇すると、台湾株安台湾ドル安の流れとなり、月末にかけて年初来高値を更新した。なお、9月については四半期に一回の台湾中銀の金融政策決定会合が開催されたが、2会合連続の据え置きとなった。楊CBC総裁からは、2024年についてはCPIが2%未満の伸び率を想定しているものの、これまで台湾の長期的に物価上昇率は1%前後であったが、長期的な平均物価水準が1%から1.5%に上昇する場合、注意を払う必要があると述べており、現在の金利水準が長く続く可能性が台湾でも想定されている。

10月については、昨年の最高値32.345を試す展開となるであろう。米国のCPIが低下したことがきっかけで昨年の台湾ドル安局面は修正されたが、足許の台湾ドル安も米金利上昇・ドル高が要因のため、今後の台湾ドル相場も米国の動向次第である。現状ではソフトランディングが期待されており、ドル高の是正の可能性は低そうであるが、米国では、コロナ禍での貯蓄残高の減少や学生ローンの返済猶予の停止、エネルギー価格の上昇と、堅調な消費に対して懸念材料もあるため、米経済指標の悪化により利下げ時期の前倒し期待が高まれば、ドル/台湾ドルも反落することも念頭には入れておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

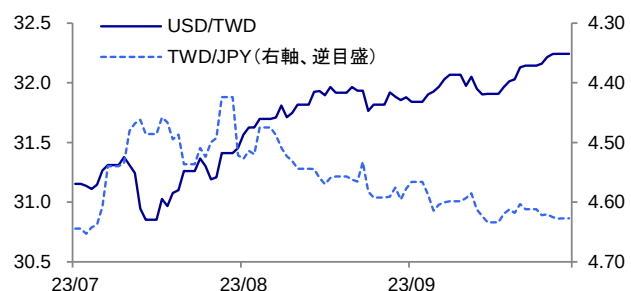
『当地の酒事情』

当地で作られるお酒をご紹介します。まず伝統的なお酒から。高粱酒(ガオリャン)と呼ばれるアルコール度数の高い蒸留酒があります(いわゆる白酒の一種です)。贈答用に豪華な器に入っていることもあります。日本人派遣員には、いい思い出の少ないお酒と思います。なお、紹興酒は少ないです。海外でも人気なのは台湾ウイスキー。暑い地域で意外に思われるかもしれませんが、海外で数々の賞を受賞してから人気に火が付きまして。日本へのお土産にも喜ばれます。一番消費されるのはビールで、暑い地域特有のさっぱりした台湾ビールが代表的。しかし、最近だとクラフトビールが流行りです。新興のビールメーカーも出ており、コンビニでも買えるし、ビアバーも台北で探すと結構あります。

ただし、台湾ではお酒を飲まない人が多いです。地方であれば、車やバイク通勤が増えるので、なおさら、飲まれません。しかし、飲む人はすごく飲みます。台湾式の居酒屋の熱炒(ルーチャオ)では、ビールを冷蔵庫から勝手に取って、空き瓶を積み上げる姿が見られます。また、お店に酒の持ち込みが可能な場合も多く、海外製ウイスキーを持ち込んで飲む人も見かけます。(人口少ないですが、ウイスキー輸入金額は世界第4位！)またワインが中華料理に合うためか、ワインを置いている料理店も多く、台北にはワイン専門店も多いです。最後に日本酒ですが、税金により高価なため、当地のお金持ちが高級寿司やで飲んでいるイメージです。

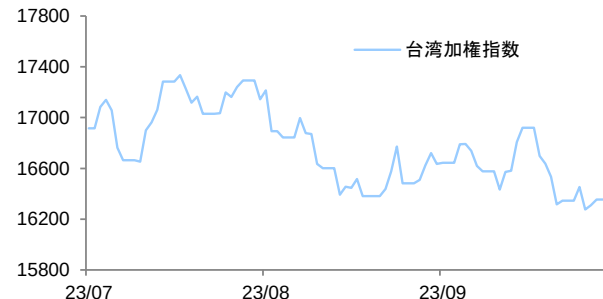
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/5	外貨準備高	8月	-	565.47B	566.49B
9/6	CPI(前年比)	8月	2.10%	2.52%	1.88%
9/8	輸出(前年比)	8月	-8.6%	-7.3%	-10.4%
9/8	輸入(前年比)	8月	-17.8%	22.9%	-20.9%
9/8	貿易収支	8月	6.15B	8.59B	8.48B
9/20	輸出受注(前年比)	8月	-11.40%	-12.00%	-24.90%
9/21	公定歩合	3Q	1.875%	1.875%	1.875%
9/22	失業率	8月	3.42%	3.42%	3.43%
8/23	鉱工業生産(前年比)	8月	-13.20%	-10.53%	-15.46%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7800 ~ 7.8400
HKD/JPY 18.50 ~ 19.40

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【9月の香港ドル直物相場】

四半期末の季節性需要が強まったことで香港ドル短期金利が急上昇し、9月の香港ドル直物相場は上昇した。香港ドルのT/Nフォワード・ポイントはプラスに転じ、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードの収益性が低下したことを示している。これによりポジション解消の動きが強まり、4か月ぶりの香港ドル安水準である7.84台後半にいた香港ドル直物相場は、一時7.81台半ばまで上昇した。中国の景気先行き懸念が深まる中、香港の株式市場は引き続き地合いが悪く、ハンセン指数は9か月ぶりの安値を再び更新した。しかし、中国本土の投資家による買い意欲は強く、ストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)を通じた香港株式市場への年初来資金流入額は2,600億香港ドルに達した。また、香港ドル金利の上昇を受けて、不動産投資は低迷している。香港の不動産価格の先行指標となる中原城市領先指数(CCL指数)は、今までの上昇幅を縮小させている。8月の香港PMI指数は49.8と、前月の49.4から小幅に上昇したものの、節目の50を下回る水準に留まった。一方で失業率は2.8%の低水準で横ばいとなっている。

【9月の香港ドル金利市場】

季節性の資金需要や香港政府によるグリーンボンドの発行を背景に、香港ドルHIBORは全期間で急反発した。翌日物の香港ドルHIBORは8月末に1.77%台で底を打つと、9月下旬には5.8%近くまで上昇した。1か月物、3か月物の香港ドルHIBORもそれぞれ5.3%台まで上昇し、米ドルと香港ドルの短期金利差は縮小している。HKMAのアグリゲートバランスについては、香港ドル直物相場が米ドルベッグ制の取引バンド内で推移した為、450億香港ドル近辺から大きく変化しておらず、香港ドル流動性が逼迫した状況は続いている。また、米国連邦準備理事会(FRB)が改めてタカ派姿勢を強めたことを受けて、引き締め期間がより長期化すると思惑から米ドルスワップ金利が上昇し、香港ドルスワップ金利も追隨して上昇した。しかし、短期金利の上昇幅の方が大きかった為、香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップ金利)は、8月末の+18bpsから+60bps近くまで急上昇している。

■ 今月の見通し

【10月の香港ドル直物相場】

FRBの利上げサイクルが終盤に差し掛かっていることや、香港ドルの市中流動性が引き続き低水準にあることを鑑みると、10月の香港ドル直物相場は取引バンドの中心値である7.80に向けて上昇すると見ている。第4四半期に入り、年末に向けた資金調達圧力の高まりが香港ドル金利を下支えする可能性が高い。米ドルと香港ドルの短期金利差が縮小していることも、香港ドル高要因となるだろう。しかしながら、資金の流れは流出方向に傾いている。中国の不動産セクターを巡る懸念が深刻化していることから、海外の投資家は引き続き対中関連投資の残高を減らしている為、ストック・コネクトを通じた中国本土の投資家からの資金流入が打ち消されている。IPO活動も低調なまま推移することが予想され、投資を通じた資金需要の盛り上がりはあまり期待できそうにない。

【10月の香港ドル金利市場】

四半期末の季節性要因や香港政府のグリーンボンド発行に伴う資金需要が緩和され、10月の香港ドル短期金利は低下に転じると予想される。一方で、市場参加者は年末の資金調達に向けた準備を始めることから、下値は限定的となるだろう。全体として、香港ドルの流動性が逼迫している状況は変わらない為、香港ドル短期金利は上昇方向に動きやすい。特に、年末を越える期間となる3か月物香港ドルHIBORは今後数か月間、高止まりする可能性が高いだろう。加えて、FRBがタカ派な姿勢を維持していることも、米ドルベッグ制のもとで香港ドル短期金利を高止まりさせる要因となる。また、資金調達コスト上昇の影響を受けて、住宅ローンの利ざやを確保する為にも、香港の銀行は実質的に住宅ローンの上限金利を引き上げる可能性がある。

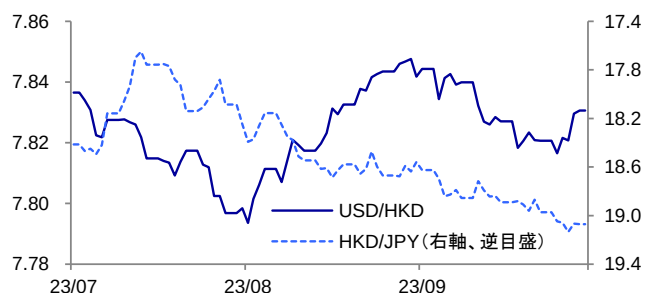
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港のお酒事情』

香港では飲酒に関する宗教的な制約等も比較的少なく、特にワインが非常にポピュラーなお酒です。2008年に香港政府が全てのワインに対する関税を撤廃するという措置を講じた為、ワインの取引が活発化し、街中でも手軽に飲めるようになりました。これにより香港のワイン文化が花開いたと言えるでしょう。また、香港人は赤ワインや白ワインに限らず、ウイスキーや日本酒等、様々なお酒を楽しんでいます。受賞歴のある有名な日本のウイスキーも香港人の間で好まれています。また、日本料理に日本酒を合わせて楽しむことも珍しくありません。夏の間、香港人は地元の”大排檔 dai pai dong”(香港の屋外レストラン)で友人達と気軽な飲み会に興じることが多いです。こうした屋外レストランでは様々な料理が楽しめますが、一緒に冷たいビールを注文するのが一番です。

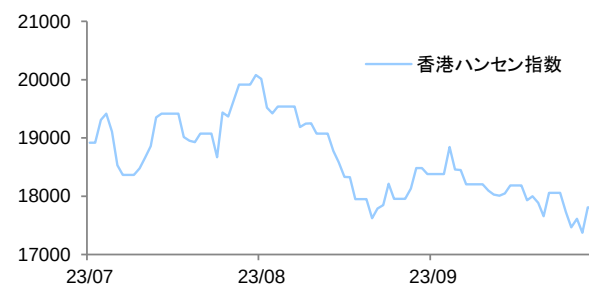
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/31	小売売上高(価額前年比)	7月	18.0%	16.5%	19.5%
9/5	S&P Global Hong Kong PMI	8月	-	49.8	49.4
9/7	外貨準備高	8月	-	\$418.4b	\$421.6b
9/13	PPI(前年比)	2Q	-	-0.2%	0.9%
9/13	鉱工業生産(前年比)	2Q	-	2.6%	3.8%
9/19	失業率(季調済)	8月	2.8%	2.8%	2.8%
9/21	CPIコンボジット(前年比)	8月	2.0%	1.8%	1.8%
9/26	輸出(前年比)	8月	-6.1%	-3.7%	-9.1%
9/26	輸入(前年比)	8月	-4.5%	-0.3%	-7.9%
9/26	貿易収支(HKD)	8月	-24.3b	-25.6b	-30.0b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	7.0000	～	7.3500
	CNY/JPY	19.41	～	20.62
	100JPY/CNY	4.8500	～	5.1500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

9月のドル人民元(USDCNY)は上昇した。

1日、USDCNYは7.24ちょうどでオープン。米雇用統計後の米金利上昇を背景に、4日の米休場明けには、ドル全面高の地合いとなつて5日には7.30に乗せた。7日に発表された8月中国貿易統計では輸出入ともに市場予想比減少幅は小幅にとどまったが、需要の弱さが意識されてかその後も元売り地合いが継続し、2022年の最高値7.3280を更新。8日、オフショア主導で元安の動きが継続し、9月高値となる7.3510をつけた。

11日、PBOCは声明において、必要であれば一方的な動きを是正する措置を講じるとの考えを示し、また市場参加者に対しては市場の安定を自主的に維持すべきである旨を公表。内容を受けてUSDCNYは一時7.27台前半まで下落した。14日には預金準備率(RRR)の25bp引き下げが発表され、一時的に元安で反応するも値幅は限定的となった。15日に発表された8月小売売上高・工業生産が事前予想を上回る伸びを示したことで元買いが強まり7.24台まで下落を見せたが、さらなる下押しとはならず7.27台へすぐに戻す展開。

20日、PBOC貨幣政策局鄒瀾局長が記者会見で“外国為替市場を混乱させる行為を断固として取り締まる”と表明したが、市場の反応は限定的。その後のFOMCの結果やパウエル議長の発言を受けて主要通貨に対してドルが上昇する展開にUSDCNYは21日に7.31台まで上伸した。25日以降は国慶節を控え、月末気かけでは7.30を挟んだ推移が続いた。

■ 今月の見通し

USDCNYの上値余地は限定的ながら下値も固く推移する展開を予想。

先月は昨年のドル高トレンドの中で11月初に付けた高値(7.3280、オンショア)を一時的に更新した。中国における厳しい防疫措置解除の兆しが見えた昨年11月以降、USDCNYは6.70割れまで調整したが、結局国内経済回復への期待は腰折れとなって、米中金融政策格差を背景にここまで底堅い動きを続けており、しばらくは下支え要因として機能する可能性が高い。

他方、7.30台まで戻した8月以降では、PBOC基準値設定において元高方向へのカウンターシニカルな動きや、当局が一方的な元安の動きに対するけん制をさらに強めるなど、7.30アッパーの水準がひとつの防衛目線とも見られ、USDCNYは下値の固さを確認しつつも足元では上値の重さが目立つ。米中それぞれの金融政策の方向感を探る展開が続くことが想定される中でUSDCNYについては高値圏でしばらくもみ合う展開を予想したい。

中国へ目を向けると、7月24日の中央政治局会議以降の2か月間で多数の景気浮揚策がアナウンスされた。一級都市での住宅ローン要件緩和等が話題にもなった不動産の分野に限らず、市場における証券取引印紙税の半減等、多面的なアプローチで政策を総動員する動きとなっている。5か年計画における成長目標達成に向け、今後も積極的な政策運営が続くことが想定される。米国の利上げ局面もピークアウトを迎える中、中長期的な視点ではUSD安CNY高方向への圧力が徐々に強まってくることを想定しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の酒事情』

中国で時節での会食やお祝い事の際に供されるものといえば「白酒」です。アルコール度数は50度を超える強いお酒ですが、小さな杯で何度も乾杯(中国語で干杯、文字通り飲み干す)します。日本ではなかなか飲む機会がありませんので、私も初めて飲んだ時には、喉にガツンとくる熱さと意外とスッキリとした飲み心地に驚きました。

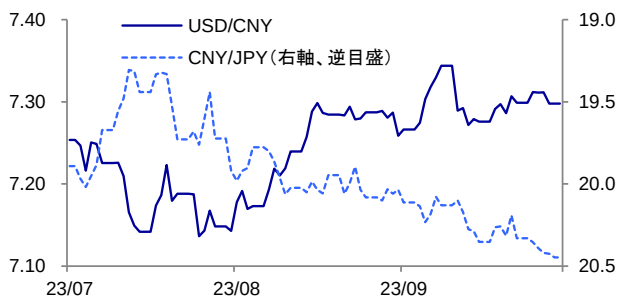
白酒と一口に言っても、本場中国にはその産地など様々な種類が存在しています。最も有名な銘柄が貴州の「茅台」です。清代の頃から製造されている歴史ある白酒であり、贈答品としても利用され、1本あたりの値段も通常の物でもゆうに5万円を超え、ものによっては百万円も超えてきます。

しかしながら、時代の移り変わりか、若者たちはあまり白酒を飲まなくなっているようです。ただし、日本で若者にウイスキーを飲んでもらおうとハイボールが広まったように、当地でも多方面で白酒のプロモーションをしています。昨年は茅台アイスクリームを、今年は大手コーヒチェーンとコラボして茅台カフェラテを出す等、白酒の持つイメージのアップデートを図ろうとしています。

日中間の移動も緩和され、出張等で中国へ来る機会も増えるかと思いますが、会食の際は当地の洗礼をしっかりと受けて頂きます様、よろしくお願いいたします。

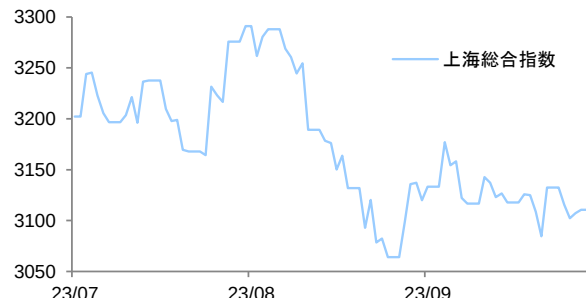
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	財新製造業PMI	8月	49.0	51.0	49.2
9/5	財新非製造業PMI	8月	53.5	51.8	54.1
9/7	貿易収支	8月	\$73.90b	\$68.36b	\$80.38b
9/9	CPI(前年比)	8月	0.1%	0.1%	-0.3%
9/9	PPI(前年比)	8月	-2.9%	-3.0%	-4.4%
9/15	工業生産(前年比)	8月	3.9%	4.5%	3.7%
9/15	小売売上高(前年比)	8月	3.0%	4.6%	2.5%
9/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	8月	3.3%	3.2%	3.4%
9/20	LPR1年物	-	3.45%	3.45%	3.45%
9/20	LPR5年物	-	4.20%	4.20%	4.20%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3450 ~ 1.4100
SGD/JPY 106.00 ~ 112.00

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

先月のUSD/SGD相場は上昇する展開となった。

月初1日に1.35台前半で取引を開始。米9月雇用統計の発表後にドル売りが進み1.34台後半まで下落する局面があったものの、米8月ISM製造業景気指数が市場予想比上振れると反転し1.35台半ばまで上昇した。4日はNY休日となる中小動きとなったが、5日は中国の冴えない経済指標の結果を受けアジア通貨売りが進む中、1.36台前半まで上昇した。6日から8日にかけてもアジア通貨売り優勢の展開が続き1.36台半ばまで水準を切り上げた。

11日、中国人民銀行(PBoC)が市場予想より基準値をCNY高方向へ設定したこと等から人民元が上昇するとSGDも連れ高となり1.35台後半まで下落。13日は米8月CPIが市場予想を上回りドル買いが強まる局面もあったがすぐに発表前の水準に戻された。14日、良好な米経済指標を受け1.36台前半まで上昇した。

18日から19日はFOMCを控えて1.36台前半を中心としたもみ合いが続いたが、20日のFOMCの内容がタカ派な結果となるとドル買いが強まる展開に。21日も前日FOMC後の流れを引継ぎドル買い基調が継続する中1.36台後半まで上昇も1.37を目前に失速。22日は弱い米経済指標を受け1.36台前半まで下げたものの、ボウマンFRB理事のタカ派発言を受け1.36台半ばまで水準を戻した。

25日、8月CPIの結果が発表され、前年比では前月分より小幅に低下し4.0%となるも市場予想通りの結果であったことから反応は限定的であり1.36台半ばから後半でのみみ合い推移に。26日から27日にかけては米金利が上昇基調で推移する中USD/SGDは1.37台まで上昇する展開となったが、29日に入りドル高に一服感が見られ、横ばい推移となっている。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は引き続き底堅い推移を予想。

今月はシンガポールにおいてMAS会合が開催される。前回の4月会合においてはそれまで臨時会合を含め5会合連続で行ってきた金融引き締め打ち止めを決定したが、今会合においても現状維持が予想されている。足元のシンガポール国内の経済について、MASが発表した2023年9月時点の民間エコノミスト調査では23年の実質GDP成長率の予測中央値が前年比1.0%となり、前回調査の2023年6月分と比較して0.4ポイント低下している。経済的に結びつきが非常に強い中国の経済動向に対する懸念が高まっていること等を背景にシンガポール経済についても不透明感が意識される中では前回打ち止めとした金融引き締めを再開するような状況ではないと考えており、SGD買いにつながるイベントとはなりづらいと考えている。

また、9月に開催されたFOMCにおいては金融政策の現状維持が決定されたが、ドットチャートにおいて2024年末の金利見通しが6月分と比較して引き上げられたこと等からタカ派な内容と受け止められFOMC後には米金利が上昇しドル買いが強まる展開となった。年内の利上げについても残り1回の利上げが示唆されたが、足元の市場の織り込みを見ると、残り0.5回弱しか織り込みは進んでおらずFRBと市場の見方には乖離がある状況。米経済指標において底堅い内容が確認されていることを踏まえるとドットチャートで示された通りに追加利上げがある可能性は相応にあると考えられ、その場合は一段の米金利上昇圧力が高まることが想定される。引き続き米経済指標やFRB高官の発言を受けてボラタイルに動く局面は想定されるものの、依然として利下げではなく利上げの有無に注目が集まる状況であることを勘案するとドル売りの動きは控えられやすいと考えている。

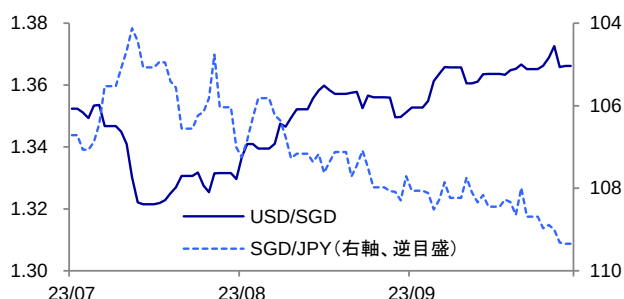
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の酒事情』

シンガポールにおける酒事情といえば「高い」という話になるか。当地は兎に角値段が嵩む。外食時ビールを頼むと1杯1,500円を超えることも。日本酒も一升瓶など頼もうものなら、日本で7,000円前後の銘柄が当地では3万円だ。円安地合いなので円換算で書くとより哀しい気持ちになれる。何故こうも高い。「酒税でしょう」と誰かが言う。だが私はそれは不正確であると思う。私の認識では当地の酒税は「容量×88SGD×度数」(ビールはまた別の計算式)であり、日本酒が15度と仮定すると一升瓶の場合「1.8ℓ×88SGD×15%」で約24SGDが酒税となる。つまり原価70SGD前後のお酒が税要因のみで「250SGD」のようなプライシングにはならない。だが実際のこのような値段で売られている。これは即ち当地の従業員の方々の人件費であったり、雰囲気プライシング、つまり「周りが高く売ってるから」等の要素があると理解したうえで、感謝を込めて注文しなければならないと考える。実際これだけ高かろうと当地に日本酒ファンは多く、品切れの銘柄が目立つ。自然と価格も高騰するわけで、インフレ・マインドとはなんたるかを体験することが出来る。先日、当地で映画「THE FIRST SLAMDUNK」を見た。当地では日本酒も日本のアニメも大人気だ。鑑賞後、「スラムダンクのお酒がある」と教えると知人は興奮し「飲みたい!」と騒ぐ。「三井の寿」を探すのは困難であったが、幸運にも何店舗目かで見つけることが出来た。なおシンガポール人がお酒を飲まないというのは間違った認識であり、人によっては酒豪。知人は四合瓶で88SGD(税前)を超える高級酒を瞬で飲み干し、最終的に2人で2本空けてしまった。日本であれば1本40SGD程の値段であること。そんな風に飲むべきお酒じゃないことなど無料なこととは言わず、現地の仲間と希少な日本酒を飲めるという幸せな時間に感謝したのでした(アジア・オセアニア資金部 成田)

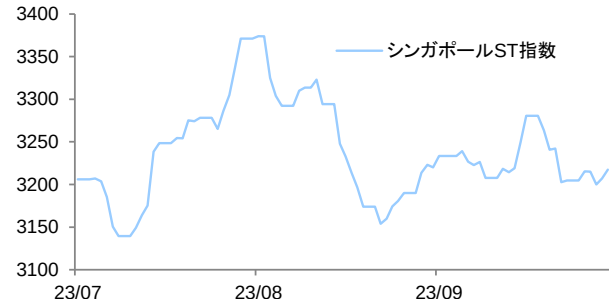
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/5	小売売上高(前年比)	7月	2.1%	1.10%	1.00%
9/18	非石油輸出(前年比)	8月	-17.1%	-20.1%	-20.3%
9/25	CPI(前年比)	8月	4.0%	4.0%	4.1%
9/26	鉱工業生産(前年比)	8月	-3.1%	-12.1%	-1.1%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 35.90 ~ 37.40
THB/JPY 4.00 ~ 4.15

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

9月のドルバーツは35バーツちょうど付近で取引を開始して昨年11月以来のバーツ安水準をつけた。1日発表の米8月雇用統計では労働需給の逼迫度合いが緩和されつつあることが確認されたが、同日発表の他の指標が予想を上回る強弱混交の結果となつて為替相場に大きな影響無し。米国休日から始まった翌週は堅調な米長期金利の動向に加え、中国経済指標の予想比悪化、タイ8月CPIの予想外の上振れが判明。その上、タイ中銀セタブット総裁からタイ経済の先行きに対する弱気な見通しが出る等悪材料が重なり、35バーツ台半ばまでバーツ安が進んだ。また、サウジアラビアとロシアが原油の自主減産を予想外に延長して原油高を招いたことも資源輸入国であるタイの経常収支悪化やインフレ再燃を意識させたため、バーツ売りを助長した。

中旬は対ドルで軟調地合いが続く人民元を安定させようと中国人民銀行が為替相場を安定させる方針を表明。ドル人民元の下落に合わせドルバーツも一時35.40台まで下げた。しかし、セーター新首相が最低賃金の引き上げ前倒しを表明して企業への影響が懸念された他、2023年4Qには原油需給バランスが更に悪化するとのOPEC月報が公表され、再びバーツ売り優勢に転じた。

20日のFOMCというイベントを前にしてもバーツ安の流れは止まらず、セーター新政権の公約実現に向けた予算拡大に伴う債券供給過剰懸念や、約10カ月ぶりの原油高水準が追い打ちをかけたため、ドルバーツは遂に昨年11月以来の36バーツ台へ。FOMCでは、パウエル議長から米経済に対する強気な見通しとインフレ抑制は道半ばにある旨の発言がなされ、更にDotチャートでは年内残り1回の利上げ及び2024年と2025年の政策金利の予想中央値引き上げが示される等タカ派な結果となった。ドルバーツは週末に一時調整が入るも、FOMC後の米金利高に支えられて36バーツ台半ばで底堅く推移。その後明確な材料があったわけではないが、連日米金利が上昇し、米10年債利回りが2007年以来の水準を示す状況の中で一層ドル高が進むと、36バーツ台後半へ上昇。28日オンショア市場引け間際までの前月末比対ドル騰落率では、ほぼ全てのアジア通貨の2倍以上も対ドルで下落することとなった。

■ 今月の見通し

10月のドルバーツは引き続き上値を探りながら底堅い動きを予想。9月の対ドル月間騰落率を見ると、タイバーツは主要なアジア通貨の中で最も対ドルで下落した。バーツ安の原因は国内外それぞれにあるが、これらが短期的に解消される問題ではないため、バーツが対ドルで反発する地合いにはなりにくいと考えている。

まずタイ国内に目を向けると、選挙～政権樹立まで過去最長の期間を要したセーター新政権が稼働したが、公約にあったように財政拡大を伴う景気刺激策が多く、財源が国債増発で賄われるのではとの思惑からタイ債券市場では供給過剰を懸念して外国人投資家の売りが活発化し、バーツ建資産から他通貨へのアロケーションが見られた。また、企業への影響を顧みない最低賃金引き上げを前倒しする意向の表明や資源高に伴う物価上昇再加速の懸念等もあり、タイ経済は失速した2Qからの立ち直りが不安視されている。更に、頼みの観光客、特に中国人観光客は新たにビザ免除の対象となったが、人民元安や運賃上昇によって当初予想ほど回復しないとの見方もあり、明るい材料が少ない。

次に海外の要因について、他のアジア新興国通貨同様に米金利の高止まり長期化観測によるドル高と中国経済の弱さがバーツの重しになっている。9月FOMCでパウエル議長は米経済は力強いと評価しており、Dotチャートでは来年以降の金利見通しが引き上げられた。そうした状況下、米ドルは高金利、安全な資金運用手段且つ高成長国通貨と三拍子揃って非常に買われやすい。タイミング的にも10月はFOMCが無く、経済指標によってドル高局面が幾分調整されることはあるかもしれないが、タカ派な9月FOMCが市場参加者のベースになるためにドル安に転じるとは考えにくい。

また、中国経済についても、足許では中国不動産大手の子会社が債券の元利金支払が出来なかったことが悪い注目を浴びている。加えて同社の債務再編のための債権者集会も延期される等再び不動産セクター発の信用不安の高まりに直面。若年層の高い失業率や不動産セクターの不振等もあって中国の財消費は冴えず、引き続き人民元の影響を受けやすいバーツの足枷となるだろう。

以上より、タイ国内外を見渡すとドル高・バーツ安に作用する要因が多く、ドルバーツは更なる上値トライがメインシナリオと見ている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の酒事情』

タイには南国特有のゆるいイメージがあると思いますが、法律で酒類を購入できる時間帯が決まっているほか、年に数回禁酒日もあるため、寧ろお酒に関する規制は日本より厳しいです。但し、タイ人の陽気な国民性もあって、大人数で盛り上がるのが好きな人が多く、酒の消費量は世界で5番目に多いという統計データがあります。

常夏のタイでお酒と言えば、爽やかな飲み口のタイビールを氷が入ったグラスに注いで愉しむ飲み方が鉄板ですが、近年タイ産ワインの注目されています。ワインと聞くと、伝統的なヨーロッパ産もしくはアメリカ・オーストラリア、チリ産の新興ワインというイメージを持たれると思いますが、実はタイ産ワインは世界的なワイン品評会でも受賞歴を持つ銘柄が複数あり、ワイン通の人々から注目を集めています。

タイワインのおすすめは下記のワイナリー産が有名且つ賞の受賞歴もある、しっかりとしたワインのようです。

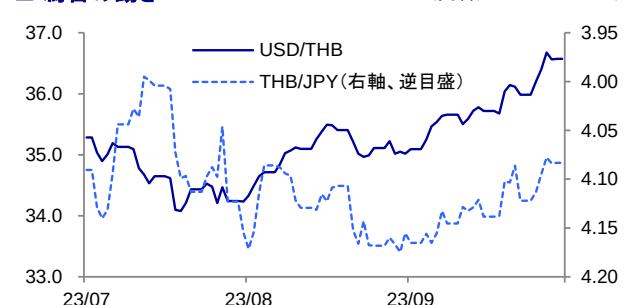
- 避暑地として有名な北部カオヤイのカオヤイワイナリー
- 世界的観光地パタヤ近辺のシルバーレイクワインヤード
- 王室保養地フワヒンのサイアムワイナリー

私は2.シルバーレイクワインヤードにしか行ったことがありませんが、一面に広がるブドウ畑は壮観ですし、ワインショップ併設のレストランでワインと美味しい料理に舌鼓を打つことが出来るため、家族でもカップルでも楽しめる観光スポットだと思います。タイに何度も来た事がある方にとっても新たなタイの魅力を発見できるきっかけになると思いますのでお勧めです。

なお、タイのお酒ではありませんが、タイ人女性を中心に日本の梅酒が人気上昇中で、バンコクに梅酒バーが複数あることも当地の1つの酒事情です。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/5	CPI YoY	8月	0.61%	0.88%	0.38%
9/5	CPI コア YoY	8月	0.80%	0.79%	0.86%
9/14	消費者信頼感指数	8月	-	51.6	50.3
9/21	自動車販売台数	8月	-	60,234	58,419
9/26	輸出(通関ベース) YoY	8月	-5.00%	2.60%	-7.30%
9/26	輸入(通関ベース) YoY	8月	-10.00%	-12.80%	-11.05%
9/26	貿易収支(通関ベース)	8月	-\$1,761M	\$360M	-\$78,399M
9/27	タイ中銀政策金利	-	2.25%	2.50%	2.25%

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.65	～	4.75
	MYR/JPY	31.25	～	32.25
	JPY/MYR	3.10	～	3.20

マレーシアみずほ銀行 内田 壘

■ 先月の為替相場

先月のリングgit相場は、国内指標で目立ったリングgit買戻し材料となる発表がなく、依然として中国経済に対する先行きの懸念が続く中、ドル上昇を材料に軟調に推移。

上旬は月初からやや急ピッチでリングgit安が進展。1日発表の米8月雇用統計の強い結果を受けてドル金利が上昇し、リングgit安が進展。またサウジアラビアが原油の自主減産の3か月延長を発表したことで原油上昇となったがドル高の流れは止まらず。7日馬中銀の金融政策会合では、市場予想通り政策金利を据え置き、特段サプライズなく市場の反応は限定的。8日発表の米9月新規失業保険申請件数も市場予想を下回るなど、上旬は米労働指標を材料にリングgitは売られる展開。

中旬は、21日米FOMCを控えてリングgit相場も狭いレンジでの取引だったが、上旬のリングgit軟調の流れを引き継ぎじりじりリングgit安が進展。13日に米8月CPIが前年比+3.7%と7月+3.2%から上昇し、米国の物価高長期化観測が再浮上するとドル高が進行。一方、12日に中国人民銀行が為替の投機的な取引に対して断固たる措置を講じるとの報道で人民元高地合の中、リングgitの下げ幅は抑えられた。その後15日に中国で発表された小売売上高や鉱工業生産が市場予想を上回ったことで一段の人民元買いが入ると市場はドル高進展しながらもリングgitには追い風材料でUSD/MYR4.70を目前に抵抗を見せた。

下旬は米FOMC発表前後で不安定な値動き。米自動車メーカーの労組ストや中国不動産関連報道でリスクセンチメントが低下したことも要因。注目されたFOMCでは金利据置きながら、委員会メンバーによる政策金利見通しが24年末、25年末共に50bp引き上げられたことがドル金利上昇を促し、為替市場でもドル高が進行。翌朝USD/MYRは朝から不安定な値動きとなり一時4.6995まで上昇。介入と見られるドル売りフローも入った他、4.7超え失敗による手じまい売りも入った。月末にかけては、期待された月末フローは力不足でリングgit買戻しトレンドは先月も結果お預けとなった。

■ 今月の見通し

今月のリングgit相場は、前月に本稿見通しで記載したと同様にリングgit買戻しの機会を探る展開が続くと見ている。国内経済の不透明感が漂う他、中国経済に対する悲観的な見通しが払拭される様子も見えない中、リングgit主導で買い進まれる地合は難しいと見る。

先月7日の馬中銀金融政策会合と同時に発表されたステートメントを確認すると、中銀の足許認識と今後の金融政策のスタンスを垣間見ることができよう。中銀は同ステートメントで足許の金融環境について、“やや緩和的”の文言を今会合から削除している。つまり、中銀スタンスとしては今後の利上げ余地を残すとした前7月会合からスタンスを変化させ、今回9月会合以降は将来的に景気支援を目的とした利下げ可能性を滲ませた格好だ。

中銀がこのようなスタンス変化を示した背景には、国内インフレの鈍化傾向が鮮明になっている点と国内経済の減速が進んでいる点が考えられる。前者で申し上げると、直近発表された8月CPIは前年比+2.0%。またコア指数も2.8%まで低下している。また、後者では輸出立国マレーシアの8月貿易統計は3か月連続の二桁マイナス成長。輸出の大幅な落ち込みが続いている。中国向け輸出の底入れが期待された8月貿易統計だったが、中国含む主要国向け輸出は軒並み大幅下落の結果が続いた。物価高騰による利上げの必要性が低下したとすれば良い兆候と言える一方、利上げ期待によるリングgit買い効果が同時に剥落した点は、USD/MYRが歴史的な高値水準の現在からするとリングgit防衛策の一つ失う舵取りをしたことは中銀としても苦渋の決断だったと言えるだろう。

かかる状況下ではあるが、市場では9月FOMCを通過し既にドル利上げは最終局面に来ている点を踏まえれば、次回11月FOMCまで2か月程度の時間がある中、今後発表される経済指標次第では、ドル売り戻しトレンドへと傾く可能性は十分あると見ている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の酒事情』

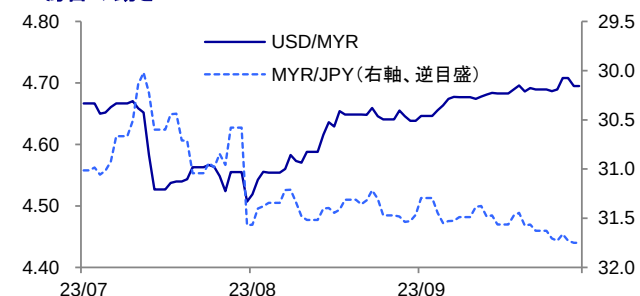
イスラム教徒の国マレーシアは、宗教上飲酒が認められていないこともあり、酒税が高く設定されています。また、免税扱いのランカウイ島は酒税が免除される一方で高級リゾートと知られており、酒税以外の所でプレミアムが乗っており、結局高めの金額設定になっています。一方、お酒の取り扱い種類に関しては、KLであれば世界各国のビールやウィスキーに加え、日本のビールも大手ビールメーカーのみならず地ビールに至るまで豊富な品揃えでお酒好きでも十分楽しんで頂けます。

イスラム教の国マレーシアですが、実は国産のウィスキーが製造されています。名前はTimah。名前はマレーシア特産の“錫”に由来しており、輸入された2種類のピーテッドモルトとマレーシア産のサトウキビを原料としたスピリッツをブレンドして作られています。小生も一度チャレンジしたことがありますが、ウィスキー初心者の方、ブレンドしたことによる効果なのかまでは分かりませんでしたが、スモーキーな香りの中から出てくる奥深い香りに驚きました。色々調べてみると、2020年、2021年と国際的なウィスキーコンペティションで受賞したこともあり、今では世界でも有名なウィスキーとなっています。

KLでは当たり前にお酒を楽しむことができますが、地方に行くとなや事情が違います。特にイスラム系住民が多い東海岸などに行くと、お酒自体取り扱っていないハラルレストランも多いですので、アルコール抜きディーナーが耐えられない方は、席に着く前に十分確認することをお勧めします。

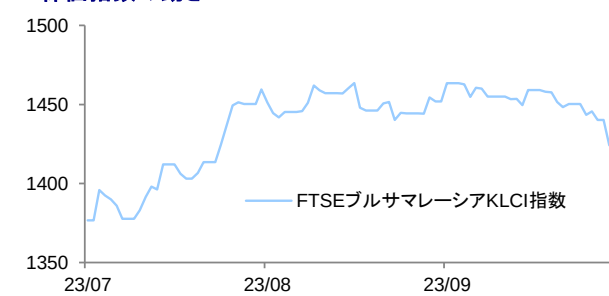
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/7	BNM Overnight Policy Rate	Sep-07	3.0%	3.0%	3.0%
9/7	Foreign Reserves	Aug 30	-	\$112.5B	\$112.2B
9/11	Industrial Production YoY	Jul	-0.2%	0.7%	-2.2%
9/19	Exports	Aug	-16.3%	-18.6%	-13.1%
9/19	Imports	Aug	-19.0%	-21.2%	-15.9%
9/19	Trade Balance MYR	Aug	17.75B	17.31B	17.09B
9/22	CPI YoY	Aug	2.00%	2.00%	2.00%
9/22	Foreign Reserves	Sep 15	-	\$111.5B	\$112.5B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15200 ~ 15700
 IDR/JPY 0.9346 ~ 0.9756
 JPY/IDR 102.50 ~ 107.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

9月のルピアは対ドルで下落。

月初1日、ドルルピアは15200台前半で取引を開始。発表されたインドネシアの8月CPIの結果は前年同月比+3.27%となり市場予想をやや下回る結果。コアCPIも市場予想対比小幅に下振れたものの市場の反応は限定的となり15200台半ばでアジア時間の取引を終了。海外時間に入り発表された米8月の雇用統計の結果は強弱まちまちの結果。翌週4日アジア時間のドルルピアは前週クローズとほぼ同水準となる15200台半ばで取引を開始。5日、中国PMI指数が市場予想を下回ったことを受け人民元が売られる展開にルピアも連れ安となり15200台後半まで下落。海外時間に入りサウジによる原油減産延長との報道を受けドル高が優勢となると、翌6日のドルルピアは15300近辺まで下落幅を拡大させた。15300近辺を中心にもみ合う展開となったが、中国が米スマホの使用規制強化を拡大との報道を受け米中対立への懸念が高まると翌7日にかけて15300台半ばまでルピア安が進展。11日、中国人民銀行(中銀)が元安を牽制する声明を発したことを受け人民元高となると、ルピアも15300台前半まで小幅上昇。13日海外時間に発表された米CPIの結果は小幅に事前予想を上回る結果となり海外時間にはドル高で反応したが、前月からインフレ率が低下した点も注目されると徐々にドル高の流れは一服。翌14日アジア時間入り後のルピアは15300台半ばでもみ合い推移となった。15日に発表されたインドネシアの貿易収支の結果は、貿易黒字が市場予想を上回ったが反応は限定的。アジア時間21日未明に発表された9月FOMC会合の結果、政策金利は据え置きとなった一方で2024年末時点における政策金利見通しが前回6月から上昇修正されたことを受けドル高が進展すると、ドルルピアは一時15400台前半までルピア安が進展し約6か月ぶりのルピア安水準を付けた。一方、この日開催されたインドネシア中銀政策会合の結果では大方の予想通り政策金利の据え置きが決定され、同会合への市場の反応は限定的となった。その後も15300台後半を中心とした狭いレンジ内での値動きが継続したが、月末にかけて実需のドル買い・ルピア売り圧力が強まる中、26日には15400台を上抜けると27日にかけて一時15500台前半を付けた。29日にかけては一部値を戻し15400台後半で推移しクローズした。

■ 今月の見通し

10月のルピアは軟調な値動きを予想。

米利上げ長期化への懸念が高まる一方、インドネシアの国内インフレは順調に低下傾向を維持しており、利下げを検討し始めて良い時期に近づきつつあると考える。米尼の金融政策の方向感の差異からドル高が進展しやすい環境となっており、中国の景気後退懸念も追い風となる中、ルピアは本年1月ぶりの安値となる15500台を付けた。これまで、ベリー中銀総裁は「為替水準の安定を優先」とのコメントを発していることに加え、外貨準備高が下落に転じていることを踏まえれば為替介入を実施していると考えるのが自然であろう。介入を行ってなお15400台後半までルピア安が進行している背景には実需による強いルピア売り圧力があるものと考えられる。実際に、貿易収支は低下傾向を維持しており、経常収支はQ2より赤字転じている。実需によるルピア売り圧力が引き続きルピア相場の下押し圧力として残存する中、中銀は利下げへ踏み切ることは難しいであろう。当面は介入により実需によるルピア安を抑えつつ、政策金利を据え置くものと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の酒事情』

イスラム教徒が8割以上を占める当地は、アルコール飲料に関して、多くの規制で厳しく取り締まられています。礼拝所、教育機関、病院に近い場所においてはアルコール飲料の販売が禁止され、21歳以上の人へのみ販売が可能です。

また、アルコール飲料全般が高額。その理由は酒税にあり、酒税はアルコール度数に応じて上がっていくので、最も税金が安いのはビールです。

外食時にお酒を飲みたいのであれば、外人向けのレストランへ行けば飲めます。高級レストランだけでなく、ラーメンと言った手軽な和食や中華料理などのレストランでもビールなどを取り扱っている場合が多々あります。

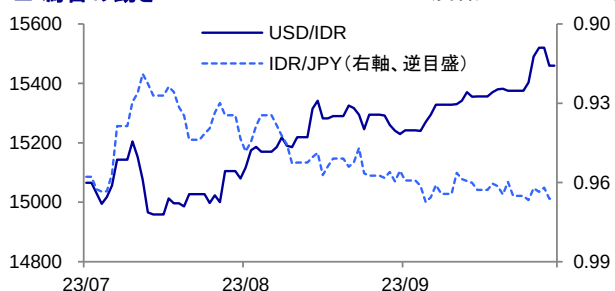
家で飲みたい時は、ジャカルタであれば目指す場所はローカル向けではない大型のショッピングモールです。大型ショッピングモールにはスーパーマーケットがあり(主に地下階)、そのレジ近くでビールを売っている可能性が高いため。

当地で最も知名度の高いビールの1つはBintangビールです。醸造所はオランダのビール会社ハイネケンが所有しています。Bintangとは「星」という意味でボトルのデザインにも採用されています。通常のBintangビールの他にもレモン味のものや、ノンアルコールビールのBintang Zeroなども販売されています。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

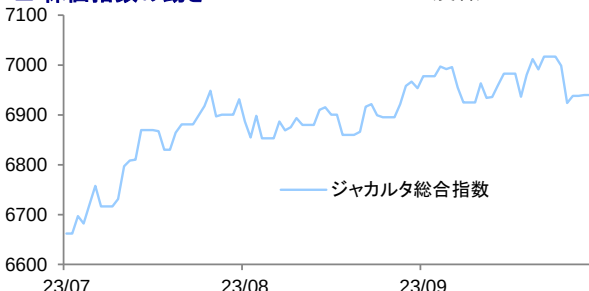
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
9/1	CPI (前年同月比)	8月	3.34%	3.27%	3.08%
9/15	貿易収支 (USD M)	8月	1,500	3,120	1,310
9/15	輸出 (前年比)	8月	-22.60%	-21.21%	-18.03%
9/15	輸入 (前年比)	8月	-9.00%	-14.77%	-8.32%
9/21	BI 7daysリバースレボ金利	-	5.75%	5.75%	5.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 55.50 ~ 57.50
JPY/PHP 0.375 ~ 0.395

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

8月の米雇用統計の強い結果を受けて、ドル上昇となったほか、8月の米消費者物価指数が食品価格上昇を主要因に前年同月比+5.3%と市場予想の+4.7%を大幅に上回り、7か月ぶりに伸びが加速したことから、ペソは9月に入り軟調推移となった。6日には中国経済に対する懸念からアジア通貨は全面安となり、ペソも一時、昨年11月下旬以来となる、1米ドル=59.990ペソまで下落するも、金融当局者が想定しているレンジ上限の1米ドル=57ペソ付近ではサポートされ、その後も米経済指標の上振れを受け、ドルが全般的な強さをみせ、アジア通貨は軟調となるもペソは底堅さを見せた。7月の米失業率は4.8%と前月の4.5%から上昇したほか、7月の貿易赤字が前月の39.2億ドルから42億ドルに拡大したが、ペソ買戻し優勢となるなど、上旬はアジア通貨が全般的に弱含むなか相対的な強さが見られた。

中旬に入り、米消費者物価指数の発表を控え、その他の重要指標やイベントもない中、様子見ムードが強く、ペソは狭いレンジでの推移となったが、米消費者物価指数の結果が大方の予想通りの無難な結果となり、市場への影響も限定的となったことから、ペソは1米ドル=56ペソ台後半でのレンジ推移継続となった。その後、比中銀のレモナ総裁が8月のインフレは加速したものの、次回会合での政策金利引き上げの必要はないとの述べたことがペソ安要因となったほか、米経済指標の堅調な結果を受けた、米金利上昇が米ドルを押し上げたことから、7月の海外在留労働者からの送金が前年同月比で2.6%増と市場予想の2.5%増を上回る結果となったがペソは上値の重い展開が続いた。

FOMCでは来年の政策金利見通しが大幅に引き上げられるなど、総じてタカ派な内容となったことからドル全面高となり、ペソは年初来日中安値の1米ドル=59.990ペソに迫ったが、比中銀は大方の予想通り、政策金利据え置きを決定し、レモナ総裁が11月の追加利上げを示唆し、今年の利下げは検討していないとしたことから、ペソ買戻し優勢となり、1米ドル=56ペソ台を維持。長期に渡り高金利が続くとの観測から米金利上昇が継続し、ドル高地合いとなるも、レモナ総裁がペソの更なる下落を防ぐために、1米ドル=57ペソで当局が防衛していることを示唆したことから、ペソは強力にサポートされ、下旬も1米ドル=56ペソ台後半でのレンジ推移が継続した(9月27日時点)。

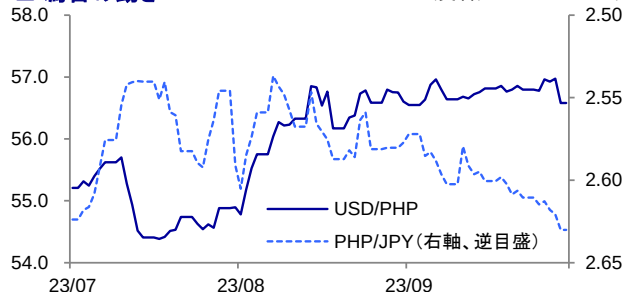
■ 今月の見通し

FOMCでは政策金利の据え置きが決定されたが、FOMC参加者による政策金利予測中央値において、年内あと1回の利上げ見通しのほか、経済の底堅い見通しを背景に2024年と2025年の金利見通しがいずれも前回の6月予測から50BP引き上げられ、高金利を長期にわたり維持するというメッセージが強調されるタカ派的な政策金利見通しが示された。米労働市場の逼迫は徐々に緩和しており、引き締めは最終局面にあるとの見方であるが早期緩和によるインフレ再燃に対する強い警戒感が示されており、来年以降の政策緩和余地が限定的となるなか、米金利低下によるドル安といったシナリオも想定しづらく、ドルは当面、底堅く推移するであろう。

フィリピン中銀は8月のインフレ加速を受けて、インフレ見通しを引き上げ、リスクは引き続き上方向にあるとの認識のなか、必要に応じて更なる利上げ可能性を示唆するなど、タカ派姿勢を維持している。米国とフィリピンの政策金利差を要因とした更なるペソ安懸念が燃えるなか、政策金利差を一定程度維持するためにも、米国同様に、追加利上げが必要となる可能性が高く、レモナ総裁もデータ次第ではあるが、追加利上げとその後の更なる利上げについて示唆している。しかしながら、利上げは短期的にはペソの一定のサポートとなり得るが、ドル主導の相場展開との見方は変わらずのほか、中長期的な経済活動への影響を鑑みると、ペソサポート効果は限定的となろう。一方、政策当局者からはペソ安定化の為に介入を実施しているとの発言もあり、介入と思しきサポートから、金融当局者が想定しているドルペソのレンジ上限の1米ドル=57ペソ水準でペソは底堅く推移しており、ここが当面の防衛ラインとなると考えられる。需給面に目を向けると、フィリピンの貿易赤字は足許、縮小しているが、今後も内需の底堅さやペソ安の影響、加えて原油価格の上昇から貿易赤字が高水準で継続し、ペソが売られやすい環境が続く可能性が高い。ペソ高にトレンド転換する材料に乏しく、ドルの広範囲な強さが今後も続き、ペソは上値の重い展開が続くとの見方であるが、1米ドル=57ペソ付近では強力にサポートされており、当面は膠着状態となる可能性が高い。

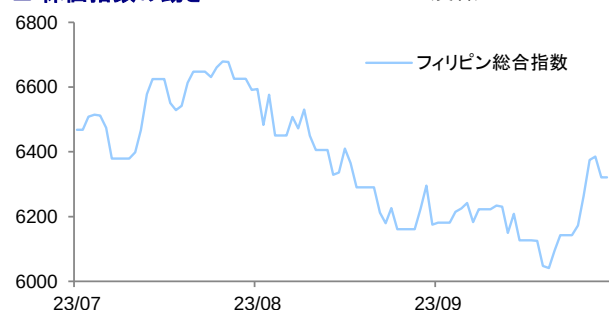
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 82.30 ~ 83.50
INR/JPY 1.71 ~ 1.85

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【9月の米ドル/インドルピーは節目83水準を超えるルピー安に】

82台半ば近傍にて当月取引を開始。月初は、節目の83水準を小幅にブレイクしつつ、じり安の展開に。その後、83水準を超えた推移が継続し下値切り上げ感も出始めていた矢先、インド準備銀行(RBI)からの強烈的な為替介入(USD売りINR買い)による上値抑えの発動がしっかりと見られたことで、一旦水準を取り戻す動きとなった。月央にかけて、実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)が優勢となり、急速にルピー安が進行したものの、インド国債の新興市場債券指数への組み入れの報道を背景に、今後のインド債券市場に対する資金流入の加速への思惑から、再び83水準を下回る水準までルピー高圧力が台頭。月末にかけては、USD高圧力に連れられて徐々に値を戻し、結局節目83水準を小幅に超えてのクローズとなった(27日時点)。

SENSEXは、発表された4～6月期GDPが、2四半期連続での加速となったことを好感し、上昇基調の流れに。年初来高値を更新しながら、一時68,000水準を視界に捉えるレベルまで上値を伸ばした。2007年以来の高騰で、11日連続での続伸を記録。その後は、一旦調整色の強い値動きとなるも、局所的な下落基調には至っておらず、下値の底堅さも併せて見えている。

インド経済指標では、8月製造業/サービス業PMIは強弱ミックスの結果に。注目された8月消費者物価指数(CPI、前年比)は、+6.83%と前回の+7.44%から小幅に鈍化。8月貿易収支は赤字幅が拡大し赤字常態化が継続、通貨として売られやすい立ち位置は変わっていない。

■ 今月の見通し

【10月の米ドル/インドルピーは上値の重い展開か】

10月においては、節目83水準超えから上値の重い展開を見込む。9月には、節目である83水準を若干上回る水準での値動きも散見されたが、RBIからの為替介入による上値抑えの動きは継続しており、過度なルピー安の流れには至っていない状況。今後、ルピー安の流れが緩やかに続く場合は、従前のレンジである82～83水準の世界から、83～84水準の新たな世界への移行も視野に入れておきたいが、一旦の目線は83水準を挟んだ攻防を主軸としておきたい。

8月CPIは、前回から小幅に鈍化したものの、引き続きインフレターゲットの上限である+6.0%からは上方に位置している状況は不変。8月会合時での、中銀インフレ見通しの引上げや、総裁会見でのインフレ動向次第で更なる利上げを検討することも示唆している中で、10月会合での再度利上げ路線への回帰に対する警戒感拭ききれない。

今後、インド国債組み入れに伴う資金流入が加速となれば、ルピー高の流れが顕著となる局面が訪れる方向感で見ておくが、その際は、RBIからの下支えの為替介入への注目度が増してくるだろう。

中長期的には、米国のタカ派的な現状維持を前提としつつ、景気後退懸念の再燃となる際は、ドル安/新興国通貨高(インドルピー高)の圧力の流れが顕在化する想定であるが、下値におけるRBIからの為替介入による下支えおよび実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)から、大きくルピー高が進行するというダイレクションとなるよりは、緩やかなインドルピー安への回帰をメインシナリオとしておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の酒事情』

インドで結婚式に招待された日本人駐在員が一樣にぼやくことが2つある。

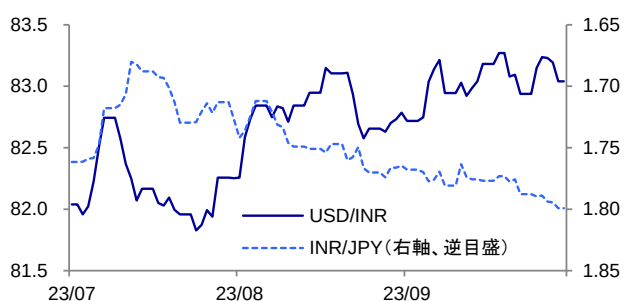
1つめは、いつまでたっても開始しないこと。招待状に「7時から」と書いてあるので、ちょっと遅めの8時に着いたところ自分が一番乗りで、新郎新婦が登場したのは10時だった、という話はよく聞く。数時間の遅延は常識だ。

2つめは、アルコールが出ないこと。ヒンディ教やイスラム教では飲酒はタブーである。都会のホテルで開催する二次会にはお酒も提供されるが、メインの挙式での飲み物は決まって水とジュースだ。日本人の現法社長も、部下の結婚式では数時間お酒なしでひたすら知らない人たちに囲まれて待ち続けることになる。

職場の食事会では大多数が酒を飲むが、女性の飲酒率は1割程度だ。地方から新卒でバンガロールに来た女子は飲み会の場で「お酒を飲んでいる人を実際に見るのは生まれて初めて」と発言した。なお、菜食であることと飲酒に相関性はなく、バンガロールオフィスで最も酒が好きな営業課長は菜食主義者だ。独身で実家暮らしの人は両親には飲酒することを隠すケースが一般的で、既婚者でも妻には内緒という人もいる。(バンガロール 木原志乃)

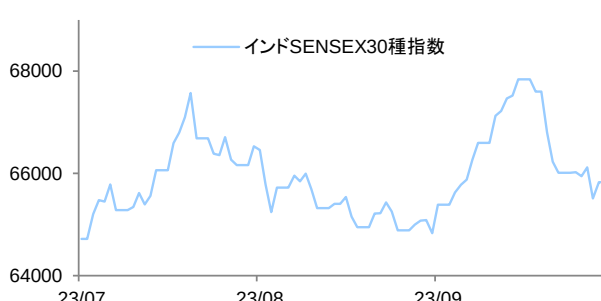
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
9/1	製造業PMI
9/5	サービス業PMI
9/12	鉱工業生産
9/12	CPI
9/15	貿易収支

(資料) ブルームバーク

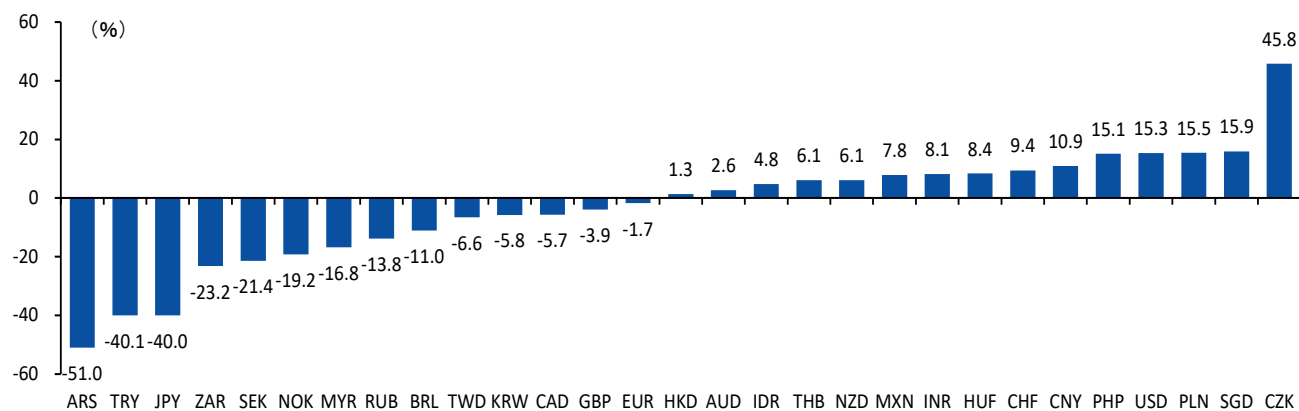
期間	予想	結果	前回
8月	-	58.6	57.7
8月	-	60.1	62.3
7月	5.30%	5.70%	3.80%
8月	7.10%	6.83%	7.44%
8月	-21,000	-24,154	-20,670

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2022年末	2023年9月末	騰落率	株式市場	2022年末	2023年9月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	33147.25	33507.5	1.1%	-
日本	USD/JPY	131.12	149.37	13.9%	日経平均株価	26094.5	31857.62	22.1%	7.2%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0705	1.0573	-1.2%	ドイツDAX指数	13923.59	15386.58	10.5%	10.5%
英国	GBP/USD	1.2083	1.2199	1.0%	ロンドンFTSE100指数	7451.74	7608.08	2.1%	1.1%
豪州	AUD/USD	0.6813	0.6435	-5.5%	S&P/ASX200指数	7038.688	7048.637	0.1%	6.0%
カナダ	USD/CAD	1.3554	1.3577	0.2%	S&Pトント総合指数	19384.92	19541.27	0.8%	0.6%
エマーGINGアジア									
中国	USD/CNY	6.8986	7.298	5.8%	上海総合	3089.258	3110.475	0.7%	-4.8%
香港	USD/HKD	7.8016	7.8306	0.4%	香港ハンセン	19781.41	17809.66	-10.0%	-10.3%
インド	USD/INR	82.735	83.04	0.4%	インドSENSEX30種	60840.74	65828.41	8.2%	7.8%
インドネシア	USD/IDR	15573	15460	-0.7%	ジャカルタ総合	6850.619	6939.892	1.3%	2.0%
韓国	USD/KRW	1260.33	1348.02	7.0%	韓国総合株価	2236.4	2465.07	10.2%	3.1%
マレーシア	USD/MYR	4.4045	4.695	6.6%	ブルサマレーシアKLCI	1495.49	1424.17	-4.8%	-10.7%
フィリピン	USD/PHP	55.741	56.581	1.5%	フィリピン総合	6566.39	6321.24	-3.7%	-5.2%
シンガポール	USD/SGD	1.3395	1.3662	2.0%	シンガポールST	3251.32	3217.41	-1.0%	-3.0%
台湾	USD/TWD	30.73	32.243	4.9%	台湾加権	14137.69	16353.74	15.7%	10.2%
タイ	USD/THB	34.608	36.571	5.7%	タイSET	1668.66	1471.43	-11.8%	-16.6%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年8月時点)



■ 実質GDP成長率

	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2021	2022
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	7.0	-2.0	-0.6	2.7	2.6	2.2	2.1	5.8	1.9
日本*	4.5	-2.3	5.3	-1.2	0.2	3.2	4.8	2.4	1.1
ユーロ圏	4.9	5.4	4.2	2.3	1.7	1.1	0.5	5.6	3.3
英国	9.7	11.4	3.9	2.1	0.7	0.5	0.6	8.7	4.3
豪州	4.6	3.0	3.1	6.0	2.7	2.4	2.1	5.3	3.7
カナダ*	6.9	2.6	3.6	2.3	-0.1	2.6	-0.2	5.2	3.5
エマーGINGアジア									
中国	4.3	4.8	0.4	3.9	2.9	4.5	6.3	8.4	3.0
香港	4.7	-3.9	-1.2	-4.6	-4.1	2.9	1.5	6.4	-3.5
インド	5.2	4.0	13.1	6.2	4.5	6.1	7.8	6.5	9.1
インドネシア	5.0	5.0	5.5	5.7	5.0	5.0	5.2	3.7	5.3
韓国	4.3	3.1	2.9	3.2	1.4	0.9	0.9	4.3	2.6
マレーシア	3.6	4.8	8.8	14.1	7.1	5.6	2.9	3.1	8.7
フィリピン	7.9	8.0	7.5	7.7	7.1	6.4	4.3	5.7	7.6
シンガポール	6.6	4.0	4.5	4.0	2.1	0.4	0.5	9.1	3.7
台湾	5.2	3.9	3.0	3.6	-0.4	-2.9	1.4	6.5	2.4
タイ	1.9	2.2	2.5	4.6	1.4	2.6	1.8	1.5	2.6

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	23/01	23/02	23/03	23/04	23/05	23/06	23/07	23/08	2021	2022
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.4	3.6	3.5	3.4	3.7	3.6	3.5	3.8	5.4	3.6
日本	2.4	2.6	2.8	2.6	2.6	2.5	2.7	2.7	2.8	2.6
ユーロ圏	6.7	6.6	6.5	6.5	6.5	6.4	6.4		7.7	6.7
英国	3.7	3.8	3.9	3.8	4.0	4.2	4.3		4.6	3.7
豪州	3.7	3.5	3.5	3.7	3.6	3.5	3.7	3.7	5.1	3.7
カナダ	5.0	5.0	5.0	5.0	5.2	5.4	5.5	5.5	7.5	5.3
エマージングアジア										
中国									3.9	
香港	3.4	3.3	3.1	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	5.4	4.3
インドネシア		5.5							6.4	5.9
韓国	2.9	2.6	2.7	2.6	2.5	2.6	2.8	2.4	3.6	2.9
マレーシア	3.6	3.5	3.5	3.5	3.5	3.4	3.4		4.6	3.8
フィリピン	4.8	4.8	4.7	4.5	4.3	4.5	4.8		7.8	5.4
シンガポール	1.9	1.9	1.8	1.8	1.9	1.9	2		2.7	2.1
台湾	3.6	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.4	3.4	4.0	3.7
タイ			1.1			1.1				

■ 消費者物価上昇率

	22/12	23/01	23/02	23/03	23/04	23/05	23/06	23/07		2021	2022
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	6.5	6.4	6.0	5.0	4.9	4.0	3.0	3.2	3.7	4.7	8.0
日本	4.0	4.3	3.3	3.2	3.5	3.2	3.3	3.3	3.2	-0.3	2.5
ユーロ圏	9.2	8.6	8.5	6.9	7.0	6.1	5.5	5.3	5.2	2.6	8.4
英国	10.5	10.1	10.4	10.1	8.7	8.7	7.9	6.8	6.7	2.7	9.1
豪州	7.8			7.0			6.0			2.9	6.6
カナダ	6.3	6.3	5.9	5.2	4.3	4.4	3.4	2.8	3.3	3.4	6.8
エマーGINGアジア											
中国	1.8	2.1	1.0	0.7	0.1	0.2	0.0	-0.3	0.1	0.9	2.0
香港	2.0	2.4	1.7	1.7	2.1	2.0	1.9	1.8	1.8	1.6	1.9
インド	5.7	6.5	6.4	5.7	4.7	4.3	4.9	7.4	6.8	5.1	6.7
インドネシア	5.5	5.3	5.5	5.0	4.3	4.0	3.5	3.1	3.3	1.6	4.2
韓国	5.0	5.2	4.8	4.2	3.7	3.3	2.7	2.3	3.4	2.5	5.1
マレーシア	3.8	3.7	3.7	3.4	3.3	2.8	2.4	2.0	2.0	2.5	3.4
フィリピン	8.1	8.7	8.6	7.6	6.6	6.1	5.4	4.7	5.3	3.9	5.8
シンガポール	6.5	6.6	6.3	5.5	5.7	5.1	4.5	4.1	4.0	2.3	6.1
台湾	2.7	3.1	2.4	2.4	2.4	2.0	1.8	1.9	2.5	2.0	3.0
タイ	5.9	5.0	3.8	2.8	2.7	0.5	0.2	0.4	0.9	1.2	6.1

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2021	2022
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.4	-3.8	-3.9	-3.8	-3.7	-3.4	-3.2	-3.6	-3.8
日本	3.9	3.7	3.1	2.4	2.1	1.7	2.2	3.9	2.1
ユーロ圏	2.3	1.6	0.6	-0.7	-0.7	-0.2	0.4	2.3	-0.7
英国	-1.5	-3.2	-4.2	-3.8	-3.8	-2.1		-1.5	
豪州	3.0	2.2	1.9	0.9	1.1	1.4	1.2	3.0	1.1
カナダ	-0.3	-0.1	0.2	-0.1	-0.3	-0.6	-1.0	-0.3	-0.3
エマージングアジア									
中国	2.0	2.0	2.1	2.4	2.4	2.2	2.2	2.0	2.2
香港	11.8	12.6	10.9	11.6	10.5	8.9	9.2	11.8	10.5
インド	-1.1	-1.2	-1.9	-2.6	-2.4	-2.0	-1.7	-1.1	-2.4
インドネシア	0.3	0.4	0.9	0.8	1.0	1.1	0.7	0.3	1.0
韓国	4.9	4.6	4.1	2.9	1.9	0.6	0.5	4.7	1.8
マレーシア	3.5	2.9	2.1	2.5	3.1	3.0	3.3	3.5	3.1
フィリピン	-1.8	-2.8	-4.6	-5.9	-4.6	-4.5	-3.3	-1.8	-4.4
シンガポール	18.0	19.8	20.1	20.3	19.3	18.5	18.1	18.0	19.3
台湾	15.2	15.6	14.8	14.2	13.4	12.1	11.9	15.2	13.4
タイ	-2.1	-2.1	-3.1	-3.7	-3.0	-1.9		-2.1	

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2023/9/21	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2023/9/22	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	4.00	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/9/14	+25bp	2023/9/14	+25bp
英国	バンク・レート	5.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/8/3	+25bp	2023/9/21	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	4.10	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/6/6	+25bp	2023/9/5	現状維持
カナダ	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/7/12	+25bp	2023/9/6	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.45	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/8/21	-10bp	2023/9/20	現状維持
香港	基準貸出金利	0.50	緩和: 2007/9/19	6.75	2008/12/17	-100bp	2011/12/14	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2023/8/10	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.75	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/1/19	+25bp	2023/9/21	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2023/8/24	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2023/9/7	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.25	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/3/23	+25bp	2023/9/21	現状維持
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.875	引き締め: 2022/3/17	1.125	2023/3/23	+12.5bp	2023/6/15	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/9/27	+25bp	2023/9/27	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行